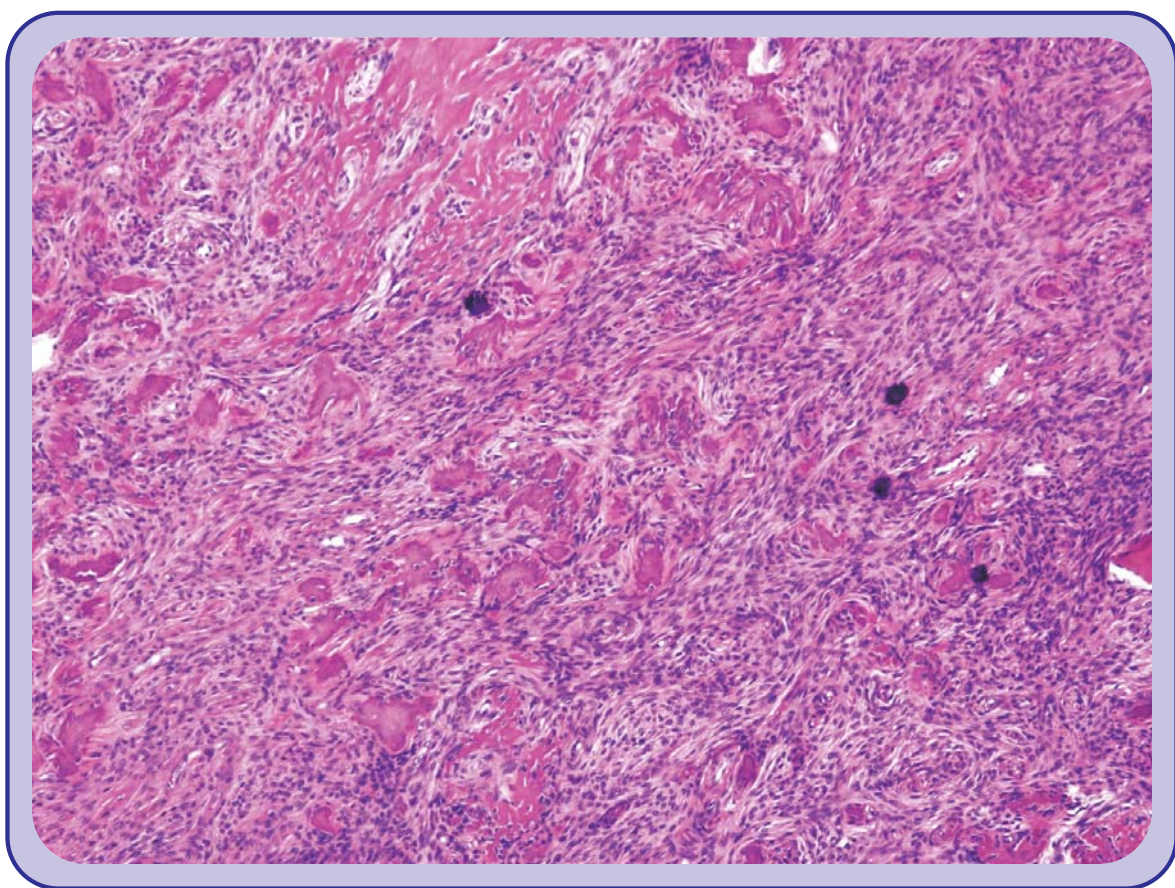


第25号

さくらしま

2011



鹿児島大学大学院
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室

同門会誌

〔表紙写真の説明〕

16歳男性上顎の Juvenile trabecular ossifying fibroma (JTOF) の症例。
術前生検の際に Osteosarcoma とされ、診断に苦慮した症例。永久病理にて腫瘍の辺縁に反応性の骨形成が Shell 状になり、きれいに整列してみられ、それを超えて腫瘍の浸潤がみられず、骨梁管に浸潤するような増殖パターンがなく、個々の細胞に異形成は乏しいことなどから、JTOF と診断した。
早水佳子

目

次

巻頭言	1
会長の挨拶	2
I. 特別寄稿	4
鹿児島大学耳鼻咽喉科時代を振り返って 松根彰志	
II. 学術	8
III. 教室来訪者	15
IV. 教室行事	
1. 共催の講演会	16
2. 第13回 耳鼻咽喉科桜島フォーラム	19
3. 第10回 「鼻の日」市民講座	20
4. 第4回耳の日ならびにアレルギー週間公開講座	21
V. 同門会報告	23
VI. 地域医療報告	
1. 学校保健（統計報告）	26
VII. 特殊外来通信	
1. 副鼻腔炎外来	29
2. 難聴・耳鳴り・補聴器外来	30
VIII. 病理集計	31
IX. 各省庁諸研究	32
X. 業績	
1. 原著	33
2. 総説	33
3. その他	35
4. 国内学会発表	36
5. 国際学会発表	43
XI. 医局通信	
1. 医局人事	45

2. 学会報告

- ① 第30回 気道分泌研究会……………46
- ② 第111回 日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会 ……46
- ③ 第34回日本頭頸部癌学会……………47
- ④ 第5回日本小児耳鼻咽喉科学会……………47
- ⑤ 第72回耳鼻咽喉科臨床学会総会・学術講演会…48
- ⑥ 第25回九州連合地方部会学術講演会……………48
- ⑦ 第40回日本耳鼻咽喉科感染症研究会・第34回日本医用エアロゾル研究会 ……49
- ⑧ 第23回日本口腔・咽頭科学会……………49
- ⑨ 第23回日本口腔・咽頭科学会……………50
- ⑩ 第49回 日本鼻科学会……………50
- ⑪ 第20回日本耳科学会総会・学術講演会に参加して ……51
- ⑫ 第60回 日本アレルギー学会秋季学術集会……………52
- ⑬ 第62回 日本気管食道科学会総会……………53
- ⑭ 第4回九州頭頸部癌フォーラム……………53
- ⑮ 第21回日本頭頸部外科学会……………54
- ⑯ 第29回 日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会…54
- ⑰ 第41回 日本嫌気性感染症研究会……………55

3. 国際学会発表

- ⑱ The 23rd Congress of the European Rhinologic Society (ERS) and the 29th International Symposium of Infection and allergy of the Nose (ISIAN) ……56
- ⑲ 第7回 国際扁桃・粘膜免疫シンポジウム……………57
- ⑳ 13th Korea Japan joint meeting ……57
- ㉑ Sixth International Symposium on Meniere's Disease and Inner Ear Disordersに参加して ……59
- ㉒ 2011年 Seven Departments (Japan-Taiwan-Korea) Joint Meeting of Otorhinolaryngologyに参加して ……60

4. 関連病院便り

- ① 国立病院機構 鹿児島医療センター……………61
- ② 鹿児島市立病院便り……………63
- ③ 藤元早鈴病院便り……………65
- ④ 鹿児島生協病院便り……………66
- ⑤ 天辰病院便り……………67

XII. 関連病院……………68

XIII. 海外同門会名簿……………71

XIV. 自治医大研修生……………75

同門会会則……………77

編集後記……………79

巻 頭 言

黒 野 祐 一

今年3月11日に発生した東日本大震災は未曾有の被害をもたらし、被災された皆様に心よりお見舞いを申し上げますとともに、一日も早い復興をお祈り申し上げます。被災地からはるか遠く離れた鹿児島においても、震災の数日後には飲料水や非常食、そして乾電池が店頭から消え去り、そのことから被害の甚大さを知ることができました。今もなお余震が続き、8千人以上もの被災者の行方が未だ知れず、さらに原子力発電所の倒壊による放射能汚染が毎日報じられ、一国民としての不安といたたまれなさを感じています。

この国難に際して全国の医療施設から多くのスタッフが継続的に支被災地へ赴き、想像を絶する環境のなかで昼夜を分かたず支援活動に従事されており、同じく医療に携わる者として心より敬意を表します。しかし、その作業は医療機材や薬品の不足、そして電力や輸送手段の制限によって思うに任せない状況にあると聞きます。災害の凄まじさをあらためて知ると同時に、文明化した現代社会の脆さについても考えさせられました。

文明化は耳鼻咽喉科の診療において言えることで、かつては年余にわたる修練と数多くの経験を必要とした耳鏡や喉頭鏡検査は、顕微鏡や内視鏡の普及によって、今では研修医でも当時以上に正確に行えます。また、優れた抗菌薬や抗アレルギー薬の開発によって、耳鼻咽喉科特有の処置をせずとも良好な治療効果が得られるようになりました。しかし、これはいずれも医療器機や薬剤の進歩に負うところであって、医師自身の技術や能力がどれほど進化したのかは疑問です。

こうした医療の進歩は大いに歓迎すべきことなのでしょうが、これがこれから耳鼻咽喉科診療を脅かすことになるのではないかと時々危惧します。たとえば、早期癌の発見に有用なNBI内視鏡の解像度は耳鼻咽喉科用よりも上部消化管内視鏡用のほうが遥かに優れており、耳鼻咽喉科医が見落としした早期下咽頭癌を内科医や外科医が発見することはあり得ない話ではありません。また、新たな内視鏡の開発や普及によって、誰でも容易に耳鼻咽喉科領域の観察ができるようになることは明らかです。したがって、耳鼻咽喉科医としての高度な診断能力と技術を磨き、その専門性を発揮できるようにしなければなりません。それにはどうしたらよいのでしょうか。

かつて甲状腺エコー検査が注目されはじめたとき、ある高名な教授が「エコーなど無くとも触診でそれくらいは診断できる」とコメントされました。少し冷ややかだった自分ですが、その意図が最近ようやく分かってきた気がします。今こそ、耳鼻咽喉科診療の原点に戻り、先人たちが築き上げた耳鼻咽喉科独自の手技を学ぶべきではないのかと考えます。とは言っても、誰が教えるのか、そのようなことに若い医師が果たして興味を抱くのか、悩みは尽きません。

新春雑感（歴史に残る年）

同門会々長 山 本 誠

新しい年になり、早いものでもう3月の声をきく今日この頃ですが、会員の皆様はいかがお過ごしですか。

新年早々の大雪、新燃岳の大噴火、中東の政治異変と今年は天変地異の年になりそうです。私の年末・年始は平穏に過ぎました。12月30日は鹿児島ゴルフコースでゴルフの予定でしたが、午後4時には娘の住む日向に出发しなければならず、天気が悪いために断念しました。日向には無事に着き、少しちらつく雪を見ながらの雪見酒で鹿児島の大雪のニュースを聞くも実感がわかず、久しぶりにゆっくりした正月を味わいました。元日は雪の影響を危惧しましたが、高速は都城まで通行止めで都城経由で郷里の垂水まで帰る事ができました。ところが、2日に鴨池フェリーを降りると、あまりの大雪に圧倒されました。このような年初めのためか1月の来院患者数は開業以来、最悪の数字となりましたが他の診療所も概ね同様であった由、安心し、患者の動向に一喜一憂する開業医の悲しい性を感じました。ただ仲間内の情報を得て心の平穏を得ることが大事であり、そのための同門会であり、耳鼻科医会であると思います。

ここまで書いて中断している時にとんでもない大地震が発生し、その惨状は筆舌に尽くしがたいものです。1000年に1度あるかないかの大災害で数万人の人々が落命し、数十万人の人々が避難生活を余儀なくされている現状に深い哀悼と同情を禁じえません。さらに原発の事故が強い不安と心配を増強させています。被災を受けられた方々にはお互い励ましあいながら、強い希望を持って復興に頑張ってもらい、被災地以外の人々は精神、物心両面でその復興を全身全霊で支えていかなければならず、我々日本人はそれができると思います。現状では催事や行事の自粛傾向があり、鹿児島市内においても、ホテルのキャンセルや宴会場のキャンセルが相次いでおり、このままでは日本全体が沈没しかねません。むしろ活性化して内需を高めてそれを復興に回す事が大事です。今年は我々が自然に対してどう生きるべきかを改めて考えさせられる、歴史に残る年になりました。

ところで、今年の総会にて同門会副会長に花牟礼豊先生、理事に新しく新納えり子先生、牛飼雅人先生、江川雅彦先生を承認していただきありがとうございます。皆で力を合わせて同門会を盛り上げていきたいと思えます。また今まで理事をしていただいた上村達郎先生、嘉川須美二先生、小幡悦朗先生には感謝申し上げます。さらに長い間、同門会幹事として事務全てをみていただいた松根彰志先生には感謝申し上げますと共に新天地でのご活躍をお祈り申し上げます。

最後に、昨年提案しました還暦などを伴う懇親会はできませんでしたが、有志での橋本眞実先生の還暦祝いの際に、橋本先生から同門会に寄付金の申し出があり、関東大震災への義援金としたいとの事になりましたのでお知らせいたします。

寄付金目録

一金 拾万円也

本日は不肖私のためにこのような祝宴
を催して戴き感謝の念に耐えません
御礼の気持ちをここに
鹿児島県耳鼻咽喉科医会 もしくは
鹿児島大学耳鼻咽喉科同門会 に
寄付させて戴きたく存じます
ご受納ください

平成二十三年二月五日

橋本 眞実

鹿児島大学耳鼻咽喉科時代を振り返って

—耳鼻咽喉科入局の動機と、「ピッツバーグ留学」,「海外の友人たちの思い出」—

松根 彰 志

はじめに

この度、27年間の母校鹿児島大学の耳鼻咽喉科医局の時代を経て、平成23年4月1日付けで、日本医科大学武蔵小杉病院、耳鼻咽喉科に臨床教授として着任いたしました。更に7月1日付けで、同病院の耳鼻咽喉科部長を拝命することになっており、着任以来、まだ日は浅いのですが、私に対する期待と責任の大きさを日々感じているところです。

今回の移動につきましては、鹿児島大学の黒野祐一教授、日本医科大学の大久保公裕教授の並々ならぬご高配をいただき感謝申し上げます。また、鹿児島県や鹿児島大学に限ったことではありませんが、不足がちな耳鼻咽喉科勤務医のマンパワーという状況下、学内外にご迷惑をおかけして誠に申し訳ありません。にもかかわらず、2月～3月にかけて、教室主催をはじめ種々、多数の壮行会や送別会を開いていただいたこと、未だに忘れられず、大変有り難く思っております。

節目のこの時期に、「さくらじま」編集委員よりお誘いいただきましたので、「振り返って」といった趣旨で寄稿させていただきます。ただし、話せば長くなるテーマですので、ここでは、副題にもありますように耳鼻咽喉科入局の動機と、「ピッツバーグ留学」,「海外の友人たちとの思い出」について述べます。これらを通じて私の心情的な風景をお察しいただければ幸いです。

耳鼻咽喉科入局の動機

私が鹿児島大学の耳鼻咽喉科学教室に大学院生として入局したのは、鹿児島大学を卒業した昭和59年でした。私は、大阪市の出身ですが、当時多くの関西出身の鹿児島大学卒業生が地元に戻る中で、私は残ることにしました。きっかけは、学生時代5年以上所属しました部活動（準硬式野球部）の部長を、耳鼻咽喉科教授の大山 勝先生がされ、OBの勝田兼司先生が助教授をしておられ、耳鼻咽喉科の医局に下級生の頃からよく入りし身近であったことが1つ。さらに、その間、短期間で教室が質、量ともに大きくなるのを目の当たりにしたということが2つ目でした。とはいえ、まったく迷いがなかったわけではなく、6年の夏休みに当時の第2外科の平 明教授に紹介状を書いていただき、大阪府千里の救命救急センターや大阪大学の特殊救急部に泊まり込みで見学に行っ

たことを覚えています。卒業後、郷里に帰ってこうした分野で貢献することにも魅力を感じていたのかもしれませんが。実家は医者ではないのですが、私には兄弟がいないため両親も卒業後は地元の大学や病院に戻ってきて研修するのだろうと（期待も込めて）思っていたようでした。しかし、見事にこれを裏切り鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科学教室（この名称がスッパリしていて今でも一番好きです。）にお世話になることにしました。ただし、当時考えていたことは、10年ぐらいで帰郷して大阪の有名スポットで開業して頑張ろうといった内容でした。両親にもそのような説明をして「老後のパラダイス」を約束しました。結局これも、父はすでに亡くなりましたので「空手形」に終わりました。

ピッツバーグ留学

私が、当初の予定よりも長く大学の医局に残ることになったきっかけは、やはり、海外留学だろうと思います。大学院の4年間が終わった年に、アメリカ合衆国のペンシルバニア州、ピッツバーグに2年間行かせていただきました。医局の現「タコ部屋」で仕事をしていたら、大山教授が入って来られて、ピッツバーグ大学への留学の話をされ、驚き半分、嬉しさ半分だったことを覚えています。ピッツバーグ大学では、山藤 勇教授の側頭骨病理の研究室で勉強させていただきました。5月に結婚して、約半年後の10月に家内と2人でピッツバーグに到着しました。到着時には、京都大学から高橋晴雄先生（現、長崎大学教授）が1年前から来ておられ、ご夫妻には生活や仕事のスタートを切るにあたって大変お世話になり、その後も、山藤先生、高橋先生から「なぜ研究をするのか?」「なぜ論文を書くのか?」などについて丁寧に熱く指導していただきました。他にも大学、研究室内外の日本人、アメリカ人などいろいろな国籍の方々と家族単位でお付き合いさせていただけたことはとても有り難く感謝しています。2年目には、京都大学から佐藤宏昭先生（現 岩手医科大学教授）、長崎大学から中島成人先生（当時、助教授）、大阪市大からは栢谷治彦先生（当時、講師）がご家族で山藤研究室に留学して来られ、すごく賑やかな「関西弁が幅を利かせる」妙な教室になりました。2年間の留学中は、学会参加や夏休みの旅行で米国内をあちらこちら家内と旅行しました。特にナイアガラ滝とワシントンDCには、日本からの客人をご案内するのにそれぞれかなりの回数行きました。（車で片道、5～6時間ぐらいです。）留学中の話をしだすときりがありませんが、とにかく、新婚早々の私と家内にとって、夫婦で共有する実に大きな思い出となり、その後の生き方に重大な影響を及ぼすものとなりました。こうした機会を与えていただいた大山先生、山藤先生には、心より感謝しております。また、若い先生方には、多少無理をしてでも、チャンスがあれば是非海外留学をしていただきたいと思います。その時は、是非とも家族で行っていただきたい。論文の1本ぐらい書いてくることは確かに重要ですが、併せてたくさんの友人を作ることが大切だと思います。私が

行かせていただいた時も、壮行会で大山先生に「一生の友達をたくさん作ってきなさい。」と言われました。この時に見たもの聞いたことが、帰国後大学で仕事をさせていただく原点になり、この時の人間関係が辛い時期にも私を支えてくれたことは間違いありません。今でも私の宝です。

海外の友人たちの思い出

私の鹿児島大学時代を振り返った時、思い出深い3人の海外からの客人たちがおられます。まずは、韓国延世大学から鹿児島大学に1年間留学された李廷権先生です。アメリカ合衆国のジョージア大学から来られた、ジャクソン教授ご夫妻が成田に着かれた時もそうでしたが、李先生がご家族で鹿児島空港に到着された時、当時大学院生であった私は荷物持ちとしてお迎えに上がりました。李先生は、鹿児島大学ご滞在中、特に鼻科学の分野で多くの素晴らしいお仕事をされ、私も学ぶところが多かったのですが、ご夫婦ともに性格が大変気さくで明るく、当時の多くの医局の先生方やスタッフからも愛され評価が高かったでした。その後、延世大学の耳鼻咽喉科の主任教授や、韓国鼻科学会の理事長をされるなど、広く世に知れ渡ることになったのですが、偉くなられてからのことはさておき、鹿児島におられた間、研究室、学会参加、夜の天文館などでご一緒した時のことが多々思い出されます。

2番目は、フィンランドのタンペレ大学から留学して来られたマルクス・ラウチアイネン先生です。私がアメリカ留学から帰国した年に来日され、1年間ご家族で鹿児島に滞在されいっしょに仕事をさせていただきました。線毛細胞の培養系を用いた生理学的研究でした。そもそも、私には入局の当初から「研究を頑張ろう。」といった考えは無かったのですが、大学院の始め頃、家兎かヒトかは忘れましたが、線毛上皮の走査型電顕写真を見てとてもきれいだと思い、きれいな電顕写真を撮るサークル活動ぐらいの感覚で、しかし一生懸命やっていたと思います。そうした行為に、研究（学問）的な理屈（論理）付けが後から付いていったと記憶しています。マルクス先生がおられた時は、「動く線毛細胞」が対象で、培養液の入ったチャンバー内に生きた線毛細胞がきれいに同期して線毛運動をしているのを見て、とても楽しい（動）画だと思い感動しました。それが、種々の薬剤投与や、温度などの条件変更で、変化する様子がリアルタイムに見られてとてもおもしろいと感じました。日によっては、朝からずっと夕方まで線毛細胞とマルクス先生とが一緒に、それだけで1日が終わりました。この頃は、毎週1泊2日で敬愛園に行って、耳鼻咽喉科診療の無い時間は、病理の後藤正道先生がおられた研究検査科に入り浸りでしたので、大学でも学外でもめずらしくよく勉強した時期だったと思います。マルクス先生も、その後偉くなられて、鼻副鼻腔の国際学会である ISIAN をフィンランドのタンペレで会長として主催され大成功をおさめられました。幸い実際

に学会に参加してこれを見とどけることができました。

3番目は、ロシアのコズロフ先生およびその仲間の皆様です。ロシアと聞いただけで、「好かん」という日本人が多いのは知っております。フィンランド人のマルクス先生やその友人の皆さんも（歴史的に）ロシアは嫌いなようです。私は、高校時代から、日本史、世界史大好きで、歴史的ないきさつは現在の北方領土問題に至るまで多々知っているつもりですが、私にとって個々のロシア人はまた別です。とてもおもしろい（オモロイ！）です。大国意識がギラギラする（鼻につく）一方で、実は多分野で「途上国」、世界のことを（日本人よりも）知らない、お人よしも多数！というのが私の印象です。コズロフ先生は、そんなロシアにあって、エリツイン時代から、（カール・ストルツ社製）内視鏡下鼻内副鼻腔手術を自らの病院に導入し、YAMIKカテーテルなるものを開発し、英文雑誌にも積極的に投稿して友人の貿易会社と組んで大いに売り込まれ、英語圏の学会にも積極的に出席され、先にご紹介したISIANのロシア、ヤロスラブリ開催の立役者となりました。私も合計3回ロシアには行っていますが、そもそもあちらの（モスクワおよび近郊の）ドクターで英語がわかるのは極少数派です。ロシア語がデンとあぐらをかいており、第2外国語は重視されず、できても仏語や独語だったりです。そもそも周囲の国々では、ロシア語を勉強するのがロシア人にとっては当たり前なのです。「周囲」の中には、旧東欧、旧ソ連邦のみならず、中東、アラブ世界も含まれています。そんな中であって、開明的で、やり手で、来日も度々で（鹿児島にも来られました）、オモロイ人物、たくましい人物として強く印象に残っています。

特に、鮮烈に記憶に残っている3人についてお話しましたが、それ以外にも多数の海外からの留学生やゲストが、大山教授時代から黒野教授時代にかけて鹿児島大学の教室に来られ、とても楽しく刺激的な経験をさせていただきました。そして、自ら留学して経験して感じたことに加え、海外からの先生方の言動を通じて、日本と海外に対する認識を新たにすることができました。それは、今や私の精神面での背骨となっています。

最後に、27年間の医局員生活は、やはり長かったと思います。この間、多くの学内外、医局内外の先輩方の忍耐と我慢のご指導のお陰で多くのことを勉強させていただきました。本文では、先輩方のお名前も含めた個々のエピソードには触れませんでした。心より感謝申し上げます。「我慢、忍耐そしてさらに我慢」、これを肝に銘じて、また気持ちを新たに戦って参りたいと思います。今後とも、尚一層のご支援をいただければ幸いです。何卒宜しくお願い申し上げます。

第25回 日本耳鼻咽喉科学会 九州連合地方部会学術集会

(2010年 7月10日 産業医科大学 北九州市)

教育講演 「好酸球性副鼻腔炎 —最新の知見—」(要旨)

松 根 彰 志

はじめに

1990年代、鼻科学、特に副鼻腔炎治療の分野で2つの大きな進歩があった。1つは、マクロライドの少量長期投与療法の確立であり、もう1つは内視鏡下鼻内副鼻腔手術の普及であった。これで、慢性副鼻腔炎の治療は決着がついたかと思われた。しかし、2000年代に入って、これらの治療に抵抗する鼻茸や副鼻腔粘膜に好酸球浸潤の著しい難治性、易再発性の副鼻腔炎が注目されるようになった。慈恵医大のグループによって、こうしたタイプの副鼻腔炎を「好酸球性副鼻腔炎」と呼ぶことが提唱された。以後、一般的にも好酸球性副鼻腔炎あるいは、好酸球性鼻副鼻腔炎と呼ばれるようになって現在に至っている。

好酸球性副鼻腔炎の臨床的特徴

本邦で初めて出版された「副鼻腔炎診療の手引き」(日本鼻科学会/編)にも好酸球性副鼻腔炎という病名の記載はあるが、診断基準の明確な記載はない。現時点では、多くの症例に基づいて臨床的特徴がまとめられている。これに、自験例をもとに得られた見解を加えて述べることにする。

- ① 鼻内には難治性、両側性多発性のポリープを認める。
- ② 鼻汁は、粘稠で黄色、好酸球性ムチンと呼ばれる性質のものである。
- ③ これらは易出血性であり手術時の出血量が多くなる傾向が強い。
- ④ 手術後、鼻茸の易再発を認める。
- ⑤ アスピリン喘息を含む成人発症の非アトピー型喘息を伴うことが多い。
- ⑥ 画像検査で、両側篩骨蜂巣を中心とした高度な病変であることが多い。
- ⑦ 難治性で高度な嗅覚障害を伴うことが多い。
- ⑧ 経口ステロイド療法が有効である。
- ⑨ 好酸球性中耳炎を合併することがある。

好酸球性副鼻腔炎と気管支喘息、アスピリン喘息

好酸球性副鼻腔炎と喘息の合併の関連を(図1)に示す。好酸球性副鼻腔炎では、鼻

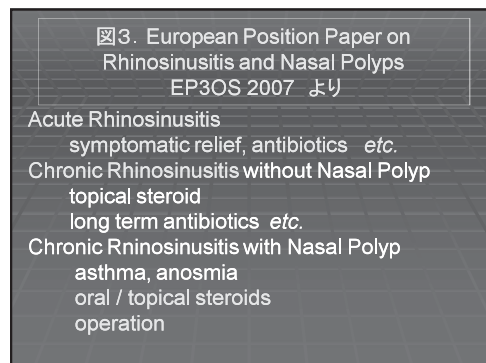
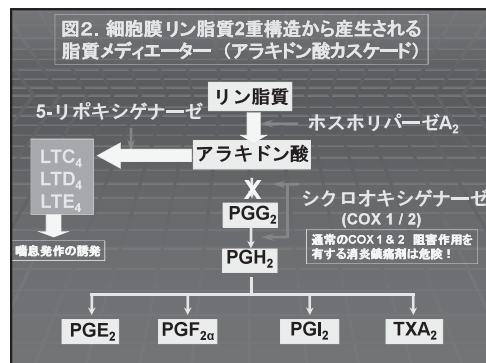
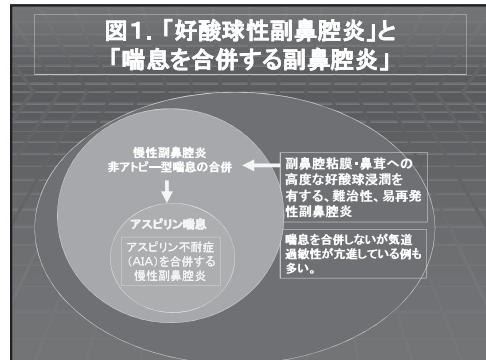
茸や副鼻腔粘膜に高度な好酸球浸潤を認める。その多くの例で、非アトピー型喘息を合併し、中にはアスピリン喘息も含まれる。喘息を合併していない例でも気道過敏性が亢進していることが多く、後に喘息を発症することがあり注意を要する。好酸球の高度な浸潤といっても、数値的な定義が確立されているわけではない。当科も含め、種々の施設がいろいろな自前の基準で報告している。

アスピリン喘息は、1967年に報告された疾患で、①喘息、②アスピリン過敏症、③副鼻腔炎・多発鼻茸の合併を3主徴とする疾患である。アスピリン喘息の病態についてはまだ不明の点が多い。現時点では、肥満細胞などでプロスタグランジン (PG) やロイコトリエン (LT) といった物質がつくられるアラキドン酸カスケード系 (図2) で、アスピリンに代表される NSAID がシクロオキシゲナーゼ (COX), 特に COX2 の働きを障害し、LT 産生優位な方向に流れ、PGE2 の減少による気道粘膜の安定性が減少するとともに、LT による気道過敏性の亢進がおこりが喘息を誘発しやすくするとの理解である。

実際どれぐらいの割合で好酸球性副鼻腔炎と喘息の合併がみられるかを当科でのデータを示す。100例の副鼻腔炎手術症例のうち、好酸球性副鼻腔炎は、28例、そのうち喘息を合併する例は18例、さらにアスピリン喘息が4例といった割合である。

好酸球性副鼻腔炎と欧米のガイドライン、アレルギー性真菌性鼻副鼻腔炎

好酸球性副鼻腔炎, eosinophilic (rhino) sinusitis は、欧米では一般的な病名とはなっていない。ヨーロッパの EPOS (2007年) と呼ばれるガイドラインでは、鼻副鼻腔炎がこのように分類されている。(図3) Chronic Rhinosinusitis with nasal polyp に含まれるのは明らかであるが、好酸球増多や IL-5 増加の観点から、別の鼻茸を分類するにはまだ Evidence 不足とされている。これは、米国を中心としてまとめられたガイドラインであ



る。(図4) 4つめとして, アレルギー性真菌性鼻副鼻腔炎が分類されている。CRS (Chronic Rhinosinusitis) with nasal polyps の中で, さらに好酸球炎症を呈するものの中に真菌アレルギーとそれを証明しえないもの とが分けられており, 必ずしも真菌アレルギー が関与していないものを好酸球性ムチン性鼻 副鼻腔炎と命名し, これが比較的わが国での 好酸球性鼻副鼻腔炎に近いと考えられる。(図 5) いわゆる好酸球性鼻副鼻腔炎は欧米で無視 されているのではなく, 類似の概念や病態論 が存在する一方で Evidence 不足により未確 立というのが現状だと思われる。国際的な情 報発信能力が必要であると考えられる。最近, アレルギー性真菌性鼻副鼻腔炎 (Allergic fungal rhinosinusitis; AFRS) が, 好酸球性 鼻副鼻腔炎との関連で話題になるが, 1976年に アレルギー性気管支肺アスペルギールス症と 類似した鼻疾患として報告され, アスペルギールスによる鼻副鼻腔のアレルギー疾患として 提唱された。(図6) その診断基準は, 2006 年に再度整理され, JACI (supplement) に 掲載された。(図7)

図4. Rhinosinusitis: Establishing definitions for clinical research and patients care
J Allerg Clin Immunol, 2004 より

- Acute presumed bacterial rhinosinusitis
- Chronic Rhinosinusitis without nasal polyps
- Chronic Rhinosinusitis with nasal polyps
- Classic AFRS (allergic fungal rhinosinusitis)

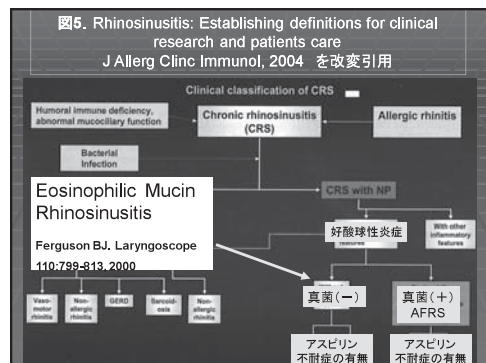


図6. アレルギー性真菌性鼻副鼻腔炎
Allergic Fungal Rhinosinusitis (AFRS)

1976年 Safirstein
鼻内ポリープ、痂皮形成認める副鼻腔炎においてAspergillusを検出、アレルギー性気管支肺アスペルギールス症と類似した症例。

1981年 Millar
Aspergillus fumigatusに対する即時型反応認める
Allergic Aspergilliosis of the Paranasal Sinusitis

1983年 Katzenstein
副鼻腔内に好酸球、Charcot Leyden結晶、真菌菌糸を含むムチン、アレルギー性アスペルギールス副鼻腔炎(Allergic Aspergillus Mucin)

その後、.....
アレルギー性真菌性副鼻腔炎(allergic fungal sinusitis)

図7. AFRSの診断基準
Meltzer EO J Allergy Clin Immunol 2006.

1. 内視鏡検査
中鼻道、中鼻甲介の浮腫、ポリープ形成。
アレルギー性ムチン(真菌、好酸球)。
2. CT, MRI 画像にて副鼻腔炎の所見。
3. 真菌に対するI型アレルギーの証明。
(特異的IgE値上昇または皮内テスト陽性)
4. 副鼻腔粘膜への真菌の浸潤を認めない。

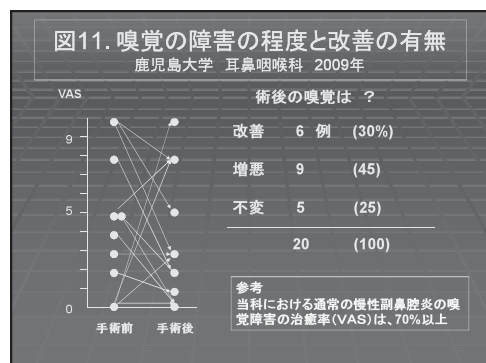
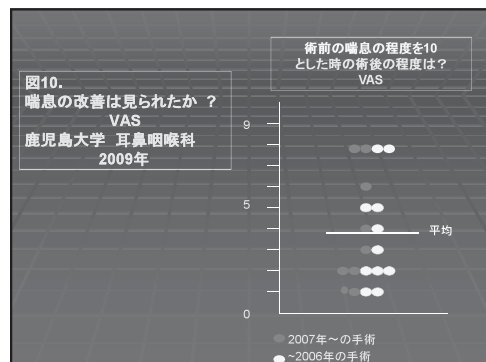
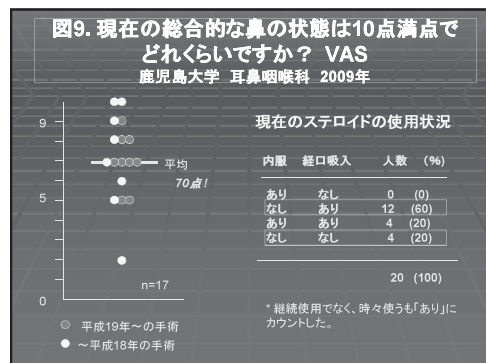
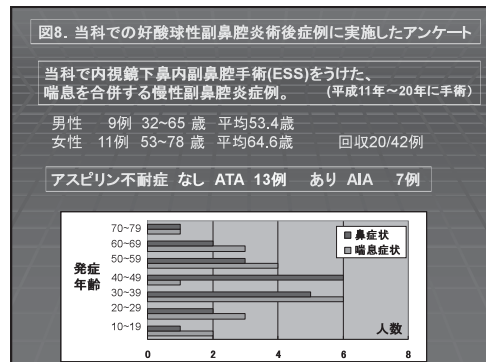
(以下、必ずしも必要なし)

6. 真菌培養での陽性。
7. 血液中総IgE値の上昇。
8. 血液中好酸球の増多。
9. アレルギー疾患、気管支喘息の合併。
10. Charcot-Lyden結晶。

細胞診テキストより転用

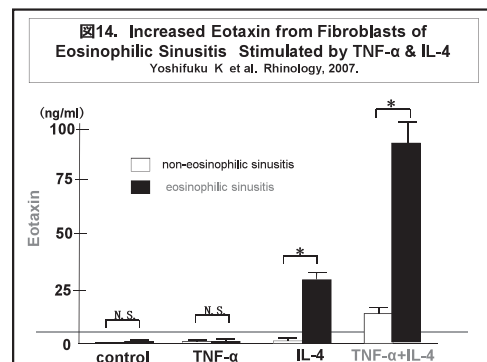
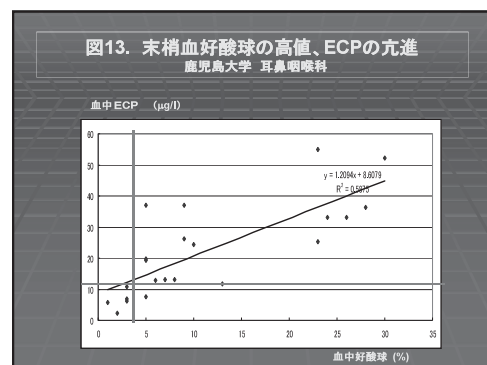
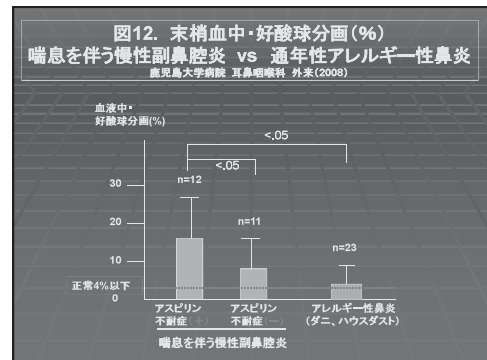
好酸球性副鼻腔炎と当科での「患者アンケート」

好酸球性副鼻腔炎の、臨床的な問題で重要と思われる点について、当科で喘息を合併する好酸球性患者に対して昨年アンケート調査を行なったので紹介する。平成11年から20年にかけて当科で手術をした、喘息を合併する好酸球性副鼻腔炎42名にアンケートを配布した。20名からの回答を得ることができた。性別、年齢の内わけは、男性9名(32歳から65歳)、女性11名(53歳から78歳)であった。鼻症状および喘息症状の発症時期については、鼻症状の発症のピークが40歳代であったのに対し、喘息症状の発症時期は、30歳代と50歳代にピークがあり2峰性であった。(図8) 現在の総合的な鼻症状について、10点満点で評価をしてもらったところ(VAS)平均7点であった。喘息を合併する好酸球性副鼻腔炎で、術後に内服のステロイドを必要としない例は全体の80%であった。更に、経口吸入ステロイドも必要としない例は全体の20%であった。(図9) 術後の喘息の経過については、喘息症状がどの程度か10点満点で評価をしてもらったところ(VAS)、平均4点までの改善が認められた。(図10) 以上の、鼻症状や喘息症状の改善の程度について、2007年以降に手術をした例と2006年までに手術をした例との間で差を認めず、観察期間の長短の違いによる影響はないと考えられた。術後の嗅覚について同様に検討したところ(VAS)改善傾向は乏しく、改善率は30%であった。(図11) 当科における、通常の副鼻腔炎の術後改善率が70%以上なので、そのデータと比べても成績は不良であった。この点からも、好酸球性副鼻腔炎の嗅覚障害は難治性であるといえる。



好酸球性副鼻腔炎の病態

ところで、好酸球性副鼻腔炎は、鼻副鼻腔局所の疾患というよりは、全身的な疾患といえる。当科の手術例で見ても70%以上が気管支喘息を合併しているが、それらのうち、アスピリン喘息を合併している例 (AIA) でも、合併していない例 (ATA) でも、アレルギー性鼻炎と比べて末梢血中の好酸球 (%) は、有意に亢進している。(図12) また、末梢血中の好酸球 (%) は、末梢血中の好酸球顆粒内組織障害性蛋白の1つである ECP (Eosinophil Cationic Protein) 濃度と正の相関を認めた。(図13) 更に、谷口、東らによると、尿中のロイコトリエン (LT)E4 濃度は、ATA 更に AIA で正常例よりも有意に亢進する。この時、手術により好酸球性副鼻腔炎の鼻茸を清掃すると、尿中の LTE4 濃度は、ATA, AIA とともに有意に減少する。そこで、彼らによると、鼻茸が尿中の LT 濃度の亢進にかかわる産生源として重要であり、好酸球性副鼻腔炎において手術が気管支喘息治療に有効性である序の1つがこの点にある。喘息を合併した好酸球性副鼻腔炎の、鼻茸中の TNF- α , Eotaxin, IL-4, IL-5 の各メッセンジャー (mRNA) を RT-PCR により定量 (β -actin 比) して検討したところ、通常の副鼻腔炎の鼻茸と比較して、TNF- α や IL-5 は多い傾向を認め、Eotaxin, や IL-4 は有意に多かった。また、鼻茸から得られた線維芽細胞の培養系を用いて検討を行なったところ、好酸球性副鼻腔炎では通常の副鼻腔炎と比べて、IL-4 や TNF- α +IL-4 の刺激により Eotaxin の産生量が有意に高かった。(図14) これは、Eotaxin が好酸球遊走能の活性化に特異的に関与するサイトカインであることから、好酸球性副鼻腔炎の鼻副鼻腔粘膜局所での病態上重要な因子であると考えられる。また、先に述べた鼻茸 (線維芽細胞) を用いた検討で TNF- α , IL-4 産生ともに好酸球性副鼻腔炎では通常の副鼻腔炎と比べて多いこともこの点で病態上重要な意味を持つ。



好酸球性副鼻腔炎の病態についてまだ未詳の点が多いが、当教室のデータも含めてこれまで指摘されている病態上重要な点をまとめると、①鼻副鼻腔局所の疾患ではなく、気道系全体を含む全身的な疾患である。②鼻副鼻腔粘膜局所にも特徴的な病態が存在する。③アレルギー性鼻炎のようなI型アレルギーは病態の中心ではない。④鼻茸粘膜でのいわゆるTh2系サイトカイン(IL-4, IL-5)の産生亢進が見られる。⑤血液中の総IgE値の亢進が見られる。以上のような、病態上重要と思われる具体的な項目を包括する病態論は現時点では確立されていない。それどころか、③と④、⑤とは一見矛盾するように思われるが、いくつかの仮説が提唱されている。(A)黄色ブドウ球菌に代表される細菌菌体成分、真菌菌体成分によるスーパー抗原説。(B)真菌プロテアーゼによる好酸球の活性化。(C)真菌によるNKT細胞の活性化とTh2サイトカインの活性化などである。

好酸球性副鼻腔炎の治療と注意点

現時点での本疾患の治療の原則は、以下の3つである。

(1) 手術－内視鏡下鼻内副鼻腔手術－

これは、通常の副鼻腔炎における内視鏡手術とは少し意味が異なる。つまり、副鼻腔と鼻腔との交通を改善し副鼻腔の換気、排泄を改善するというよりは、病的な副鼻腔粘膜、鼻茸など好酸球性炎症に陥っている粘膜の清掃と減量が目的である。

(2) 内服ステロイド療法

残念ながら通常の副鼻腔炎で有効である、マクロライド少量長期投与療法は本疾患ではなかなか良好な結果が得られない。また、我が国ではアレルギー性鼻炎治療の主力である第2世代の抗ヒスタミン薬も切れ味が悪い。病態論上期待されたLT受容体拮抗薬の効果も少なくとも当初期待されたほどではなく、少なくとも単独では不十分である。現時点では、経口ステロイドのみが有効である。我々は、手術後にプレドニゾロンの漸減療法を2週間(30mgから)行なっている。原則として糖尿病合併例にも行なっている。ただし、気管支喘息の状態によっては術前投与を行なうこともある。

(3) 長期の経過観察

通常の手術及び術後経口ステロイドの漸減療法を行い、いったん状態が飛躍的によくなった例でも、その後の経過観察は継続して行なうべきである。そして、再発傾向が見られた場合、ただちに外来で内視鏡下の処置や経口ステロイドの1週間程度(プレドニン5mg, 10mg)の投与を適宜行なっている。この間、嗅覚や内科との連携による気管支喘息の評価も併せて行なうようにしている。

本疾患における、ステロイドの使用は必要不可欠であるが、状態の悪化によりステロイドの静脈注射を行なう場合注意が必要である。サクシゾン、ソルコーテフ、水様性プ

レドニン、ソルメドロールなどのコハク酸エステル型は、喘息発作を誘発するとの報告があり危険とされている。その際には、水溶性ハイドロコトン、デカドロン、リンデロンなどのリン酸エステル型の注射が比較的安全とされている。また、鼻処置時に良く使われる4%リドカイン鼻スプレーや去痰効果を期待して使うビスルボン吸入薬などは、喘息発作誘発の報告があり使用しない方が良い。我々は、鼻処置時の鼻スプレー用麻酔としては、2%リドカインを用いている。

現時点で、薬物治療としては、経口ステロイドのみが著効が得られるとして認めとめられているが、その他の薬剤の有効性は確立されていない。LT受容体拮抗薬、Th2サイトカイン阻害薬は補助的には有効とされている。また、鼻噴霧用ステロイドの活用やリンデロン点鼻を見直すべきとの意見もある。これらは、著効ではあっても副作用が問題となる経口ステロイドに頼る期間や量を少しでも減らしたいという期待をもって行なわれている。最近、我が国でも気管支喘息の治療薬として認められた、抗ヒトIgEモノクローナル抗体製剤（オマリズマブ）の注射（商品名ゾレア）が、好酸球性副鼻腔炎にも有効ではと期待されているが臨床的なエビデンスは得られていない。今後の課題山積である。

結語

好酸球性副鼻腔炎は、通常の副鼻腔炎として見過ごされると、治らずに無駄に長い時間を費やしてしまう可能性がある。早く本疾患であることに気付き治療計画を実行すべきである。計画には、できれば呼吸器内科専門医による下気道の（治療経過を通じた）評価を組み入れたい。本疾患の早期発見は、両側篩骨蜂巢を中心とした（画像上も鼻内所見上も）重症な症例、強い嗅覚障害、気管支喘息の合併例、鼻内所見での好酸球性ムチンを思わせる黄色がかった粘性鼻漏などを手がかりにすればさほど困難ではない。最後に、受診時に喘息発作の既往がはっきりしなくても、またアスピリン過敏症のエピソードが無くても、その後、術前後に発症することがあり油断は禁物である。

Ⅲ. 教室来訪者

(平成23年4月～平成24年3月)

7月 島根大学医学部耳鼻咽喉科教授 川内 秀之

7月 熊本大学大学院医学部耳鼻咽喉科教授 湯本 英二

7月 九州大学大学院医学部耳鼻咽喉科教授 小宗 静男

1. 共催の講演会

1. 第69回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会 平成22年4月15日
 特別講演：「頭頸部進行癌に対する化学放射線同時併用療法とその予後因子」
 大阪大学大学院医学系研究科 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学
 教授 猪原 秀典 先生
 一般演題：「アレルギー性鼻炎患者の鼻粘膜における
 ヒスタミンH₁受容体発現と鼻症状について」
 牧瀬 高穂 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）
 「好酸球性副鼻腔炎に関する多施設グループスタディー報告」
 吉福 孝介 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

2. 第16回南九州上気道感染症臨床懇話会 平成22年5月27日
 特別講演：「難治性中耳炎の臨床と病態」
 自治医科大学附属さいたま医療センター 耳鼻咽喉科
 教授 飯野 ゆき子 先生
 一般演題：「肺炎球菌の咽頭上皮細胞接着についての検討」
 川島 雅樹 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）
 「当院における難治性中耳炎の現状」
 内菌 明裕 先生（せんだい耳鼻咽喉科 院長）

3. 第35回日耳鼻鹿児島県地方部会総会ならびに学術集会 平成22年6月12日
 特別講演：「深在性副鼻腔真菌症」
 佐賀大学医学部耳鼻咽喉科 教授 井之口 昭 先生
 一般演題：「下咽頭血管腫画像診断と治療」
 永野 広海 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）
 「IgA腎症の口蓋扁桃摘出術後の経過と治療成績」
 早水 佳子 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）
 「急激に発症した良性甲状腺腫瘍による反回神経麻痺症例」
 西元 謙吾 先生，松崎 勉 先生（鹿児島医療センター）
 「急性副鼻腔炎の激しい顔面痛に対する五苓散の効果」
 内菌 明裕 先生（せんだい耳鼻咽喉科 院長）

「IgG サブクラス低下を合併した幼児急性喉頭蓋炎の一例」

福岩 達哉 先生（ふくい耳鼻咽喉科クリニック 院長）

樋之口 洋一 先生，積山 幸祐 先生（かごしま生協病院）

4. 第70回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会 平成22年7月22日

特別講演1：「子どもの気道アレルギー疾患に関連して

上気道の関わりと睡眠時呼吸障害」

国立病院機構 三重病院 耳鼻咽喉科

医長 増田 佐和子 先生

特別講演2：「慢性咳嗽の診断と治療—咳喘息からGERDまで—」

京都大学大学院医学研究科内科学講座・呼吸器内科学

准教授 新実 彰男 先生

5. 第71回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会 平成22年8月19日

特別講演1：「新型インフルエンザの最新情報とその感染対策」

東北大学大学院医学系研究科 臨床微生物解析治療学

講師 矢野 寿一 先生

特別講演2：「耳鼻科医として診る小児急性中耳炎・副鼻腔炎・扁桃炎」

旭川医科大学 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室

准教授 林 達哉 先生

6. 第72回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会 平成22年8月28日

特別講演：「Current AR treatment in EU from the view point of ARIA」

University of Tampere Professor Markus Rautiainen

一般演題：「Relationship between H1R mRNA expression

levels and sensitivity in human mucosa」

牧瀬 高穂 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

「Impact of Poly(I:C) on the adherence of Streptococcus pneumoniae to human pharyngeal epithelial cells」

川島 雅樹 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

「Computed tomography image analysis of peritonsillar abscess」

大堀 純一郎 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

7. 第73回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会 平成22年9月30日
 特別講演1：「咽喉頭逆流性診療のピットフォール」
 佐藤クリニック耳鼻咽喉科・頭頸部外科
 院長 佐藤 公則 先生
 特別講演2：「嚥下障害の取り扱いー日常診療から手術治療までー」
 国立国際医療研究センター病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科
 科長 田山 二郎 先生
8. 第74回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会 平成22年10月21日
 特別講演：「甲状腺腫瘍の診断と手術手技」
 大阪医科大学 耳鼻咽喉科学教室 教授 河田 了 先生
 教育講演1：「患者 QOL を高めるスギ花粉症薬物治療の実際」
 宮之原 郁代 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）
 教育講演2：「疫学から見た小児と成人の副鼻腔炎病態の違い」
 松根 彰志 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）
9. 第12回上気道アレルギー疾患を考える会 平成22年11月11日
 ミニパネルディスカッション
 1. 「鹿児島県における減感作療法の現状ーアンケート調査を中心にー」
 うしかい耳鼻咽喉科クリニック 院長 牛飼 雅人 先生
 2. 「当院におけるスギ花粉症に対する免疫療法の治療成績について」
 せんだい耳鼻咽喉科 院長 内菌 明裕 先生
 3. 「スギ花粉症に対する舌下免疫療法」
 鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科 宮之原 郁代 先生
 4. 総合討論
 特別講演：「アレルギー性鼻炎の診断と治療」
 山形大学医学部附属病院 耳鼻咽喉科学講座 講師 太田 伸男 先生
10. 第75回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会 平成23年1月21日
 特別講演1：「目のかゆみ：どう診て、どう治療する」
 高知大学医学部 眼科学講座 教授 福島 敦樹 先生
 特別講演2：「花粉症の知られざる影響：睡眠障害と日中の眠気」
 スタンフォード大学 睡眠・生体リズム研究所
 慈恵医大耳鼻咽喉科学教室 千葉 伸太郎 先生

11. 第19回鹿児島アレルギー懇話会 ～アレルギーの克服に向けて～

平成23年2月3日

教育講演1：「スギ花粉症に対する鼻噴霧用ステロイド薬初期療法の

有効性とその作用機序」

宮之原 郁代 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

教育講演2：「食物アレルギーの診療の進め方」

今村 直人 先生（今村病院 小児科）

教育講演3：「知っておきたい気管支喘息関連疾患」

東元 一晃 先生（鹿児島大学病院 講師 呼吸器内科）

特別講演：「スギ花粉による皮膚炎の臨床的特徴、病態と治療法」

横関 博雄 先生（東京医科歯科大学 教授 皮膚科）

12. 第1回鹿児島聴覚・平衡研究会 平成23年3月3日

パネルディスカッション

～診断と治療に苦慮した症例～

岩元 正弘 先生（いわもと耳鼻咽喉科）

宮之原 郁代 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

松崎 勉 先生（鹿児島医療センター 耳鼻咽喉科）

清田 隆二 先生（清田耳鼻咽喉科）

特別講演：「めまいの診断と治療 Up To Date」

聖マリアンナ医科大学 耳鼻咽喉科学 教授 肥塚 泉 先生

2. 第13回 耳鼻咽喉科桜島フォーラム

本フォーラムは平成22年12月9日に東急ホテルで開催された。本会は毎年各関連病院の先生方が、治療に難渋した症例を持ち寄りカンファレンス形式で行われていた。今回は特別企画として、鼻出血に対する処置に関してそれぞれの先生方の処置のコツ、夜間の対処法などについて議論した。近年の鹿児島県の医師不足のあおりを受け、24時間体制での耳鼻咽喉科関連の急患を受け付ける施設は少なくなっているのが現状である。鼻出血は軽傷から重症まで様々であるが、特に後鼻出血の症例では止血に難渋することも多く、特に入院を必要とする症例については、診療所の一次処置から、病院での入院管理、手術や血管内治療での止血など、たかが鼻出血などと侮れない急患である。今回のフォーラムで診療所の先生方と病院の先生方が一緒になって鼻出血について活発に議論することができ、今後の病診連携がうまくいくような気がした。（文責：大堀純一郎）

3. 第10回 「鼻の日」 市民講座

8月7日の「ハナ（鼻）の日」（日本耳鼻咽喉科学会）にちなんで、「第10回 鼻の日 市民講座」が以下の内容で行なわれた。

日 時 平成22年8月7日（土） 午後2時～午後3時30分
場 所 鹿児島市 天文館 アイムビル 4階 ホール
参加費 無料
共 催 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 耳鼻咽喉科頭頸部外科学
および 同 同門会
日本耳鼻咽喉科学会 鹿児島県地方部会

具体的な内容は、以下のごとくであった。

司 会 鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科 吉福孝介 先生

①「鼻の病気と鼻づまり」

鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科 大堀純一郎 先生

②鼻の病気とにのびのびの病気

鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科 川島雅樹 先生

③子供の鼻の病気といびき・無呼吸

鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科 松根彰志 先生

内容は講演が3本で、それぞれ20分間の講演と10分間の質疑応答の時間を設けた。当日の一般市民の参加者は、30名で皆さん熱心にメモをとりつつ聴講された。

終了時に回収されたアンケートによると、これから取り上げて欲しいテーマとして以下のものが記載されていた。①鼻づまりや鼻血の時の応急処置等について、②鼻出血について鼻出血の処置、その後の対処法等について③アレルギー性鼻炎、花粉症についてなど。今後も、こうした要望を取り入れながら発展的に継続させていきたい。

（文責：松根彰志）

4. 第4回耳の日ならびにアレルギー週間公開講座 (第56回耳の日, 第17回アレルギー週間公開講座)

日時：平成23年3月6日(日) 13時～14時10分

場所：鹿児島よかセンター

講演内容：

1. 聞こえのしくみと難聴・耳鳴り・補聴器
鹿児島大学 耳鼻咽喉科 大堀純一郎先生
 2. めまいの原因と治療～自分でできるめまいリハビリまで～
鹿児島大学 耳鼻咽喉科 宮之原郁代先生
- 質問タイム—
3. アレルギー性鼻炎についての最近の話題
鹿児島大学 耳鼻咽喉科 教授 黒野祐一先生
- 質問タイム—

2011年は、上記内容で開催しました。耳の日市民公開講座とアレルギー週間公開講座の同時開催も今回で4回目を迎えました。会場には、高齢者や難聴の方の参加を見込み、(中)日本補聴器販売店協会のご協力で、赤外線補聴システムを準備しました。参加申し込みは64名、当日は天候が悪かったのですが、56名の参加がありました。例年4題の講演を行っていましたが、少しゆっくり話を聞いて頂けるように、3題にしました。アンケートの結果からも、わかりやすいと好評だったようです。どの講演を目的に参加されたか、という点では、いずれも40%以上とそれぞれ多かったのですが、やはり、難聴、補聴器、耳鳴りに対する関心が高かったようです。来年は、これらをふまえて、プログラム構成をしていきたいと思えます。相談コーナーについては、マンパワーの問題もあるのですが、できるだけ対処していけるよう調整していきたいと思えます。今後も社会に広くアピールできるような企画を、耳の日市民公開講座ならびにアレルギー週間公開講座として開催していきたいと思えます。ご協力いただきました多くの皆さまにこの場をかりて厚くお礼申し上げます。

アンケートの詳細は、以下の通りです。アンケート回収率は、89.3% (50名) で、うち男性11名、女性38名 (未記入1名) でした。年齢構成は、60代にピークを認めました。(図1)

アンケート結果)

- 1) 今回の講座についてどのようにして知りましたか？

新聞	40%
無料生活情報誌	28%
ポスター	4%
案内状（以前参加して希望のある方に郵送）	16%
友人にすすめられて	14%
その他（保健所ちらし、インターネットでみてなど）	6%

2) どの講演を目的に受講しましたか？

難聴・補聴器・耳鳴り	58%
めまい	46%
アレルギー性鼻炎	44%

3) 講演内容はいかがでしたか？

わかりやすい	66%
ややわかりにくい	8%
むずかしい	0%
無回答	26%

3) 講演時間はいかがでしたか？

ちょうどよい	66%
短い	26%
長い	0%
無回答	8%

4) 講演日程はいかがでしたか？

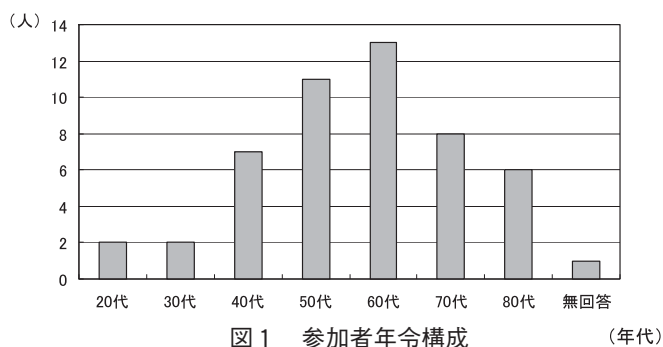
土曜日午後がよい	36%
日曜日午後でよい	42%
平日夜がよい	2%
平日昼がよい	4%
いつでも良い	2%
無回答	6%

5) これまでに参加されたことがありますか？

はい	20%	いいえ	80%
----	-----	-----	-----

6) その他

今後取り上げてほしいテーマとして、4大アレルギー疾患、加齢に伴って起こりやすい病気などがあげられました。その他、意見としては、終了後に、相談コーナーを設けて欲しいという意見が多くみられました。



(文責：宮之原郁代)

平成23年1月15日、鹿児島県医師会館にて「鹿児島大学大学院医歯学総合研究科聴覚頭頸部疾患学同門会ならびに学術講演会」が開催されました。参加者は、同門会会員総数110名中61名（委任状 45名）で、山本 誠会長の司会で進められました。

今回の主な議題は、「役員交代」でした。新旧の役員名を以下にご紹介いたします。旧役員会の皆様におかれましては、大変お疲れさまでした。また、新役員会は、規約に基づき、任期は3年間（平成26年の同門会総会まで）お勤めいただくことになります。

(旧 役員会)		(新 役員会)	
会長	山本 誠	会長	山本 誠
顧問	大山 勝 黒野祐一	顧問	大山 勝 黒野祐一
		副会長	花牟礼 豊
理事	上村達郎 勝田兼司 高木 茂 昇 卓夫 嘉川須美二 小幡悦朗 斉藤 寿 大堀八洲一 内菌明裕 今給黎泰二郎 松崎 勉	理事	勝田兼司 高木 茂 昇 卓夫 斉藤 寿 大堀八洲一 内菌明裕 新納えり子 今給黎泰二郎 松崎 勉 牛飼雅人 江川雅彦
監事	上野員義 森山一郎	監事	上野員義 森山一郎
幹事	松根彰志	幹事	大堀純一郎

(敬称略，順不同)

この度、本会会員であります浅野庄三氏が、厚生労働大臣表彰の栄誉を受けられましたので、これを同門会としてお祝いし記念品の贈呈を行ないました。

また、これまで、同門会幹事を務めてまいりました、松根彰志が、本年度3月末日に鹿児島大学を退職することとなり、鹿児島大学、現医局長の大堀純一郎が引き継ぐこと

となりました。

今回の同門会開催の概要およびタイムテーブルは以下の如くでした。

- 16時～17時 役員会
 17時～18時 同門会総会および写真撮影
 18時～19時 学術講演会 一般演題
 19時～20時 学術講演会 特別講演
 20～ 新年会もかねた懇親会

学術講演会の内容、演題は以下のごとくでした。

一般演題（敬称略）

座長 花牟礼 豊（鹿児島市立病院 耳鼻いんこう科）

1. 扁桃周囲膿瘍における画像診断と即時扁桃術の適応

馬越 瑞夫（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

2. 中耳放線菌症例

積山 幸祐（鹿児島生協病院 耳鼻咽喉科）

3. 急性喉頭蓋炎の診療の要点

吉福 孝介（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

座長 松崎 勉（鹿児島医療センター 耳鼻咽喉科）

4. 顎関節に発生した小児 primitive neuroectodermal tumor (PNET) の1例

西元 謙吾, 松崎 勉（鹿児島医療センター 耳鼻咽喉科）

5. 漢方薬が奏功した好酸球性中耳炎の1例

内菌 明裕（せんだい耳鼻咽喉科）

6. 3D-CT (3D Accuitomo) の使用経験

花牟礼 豊, 高木 実, 中島崇博, 林 多聞

（鹿児島市立病院 耳鼻いんこう科）

特別講演

座長 黒野 祐一 先生（鹿児島大学大学院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科 教授）

「外科医の技術評価と教育」

関西医科大学 耳鼻咽喉科 教授

友田 幸一 先生

（文責 松根彰志）



鹿児島大学大学院耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室同門会 平成23年1月15日 於 県医師会館

1. 学校保健（統計報告）

平成22年4月から6月にかけて、当科において鹿児島県下の以下の耳鼻咽喉科学校検診を行った。

【対象地域】

鹿児島市，阿久根市，垂水市，西之表市，松山町（志布志市），財部町（曾於市），大崎町

【受診者数】

小学生4,205名，中学生2,315名

【対象疾患】

耳垢栓塞，浸出性中耳炎，慢性中耳炎，鼻中隔弯曲症，鼻アレルギー，慢性鼻炎，慢性副鼻腔炎，扁桃肥大 の 9 疾患

【結果】

疾患別の有病率については、ここ数年の傾向どおり、鼻アレルギーが圧倒的に多く約1割であった。ついで耳垢栓塞，慢性副鼻腔炎の順であった（図1）。耳疾患は学年とともに有病率は減少傾向であった（図2）。鼻疾患では、鼻アレルギーはどの学年でも1割強の有病率であった（図3）。扁桃疾患は学年とともに減少傾向であった（図4）。

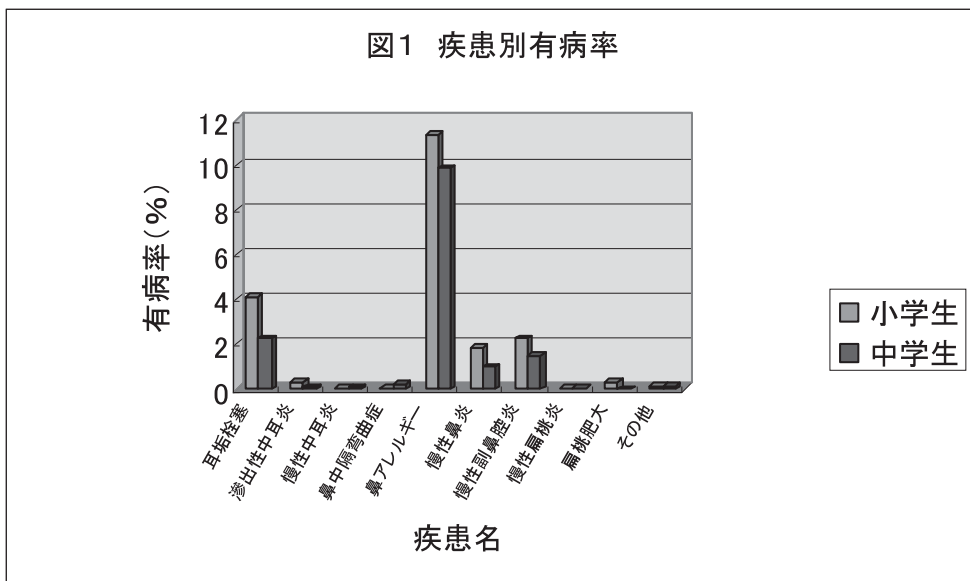


図2 学年別耳疾患有病率

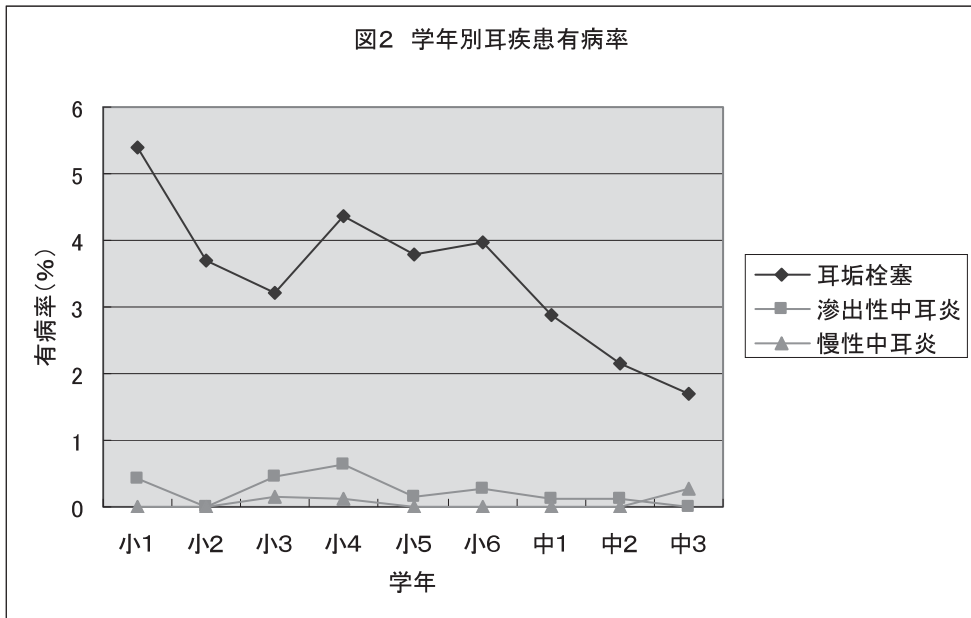
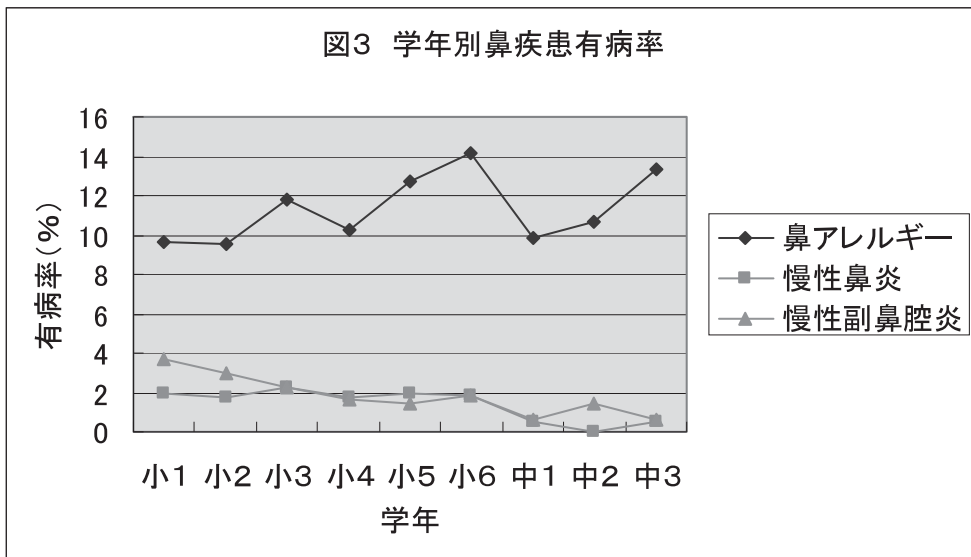
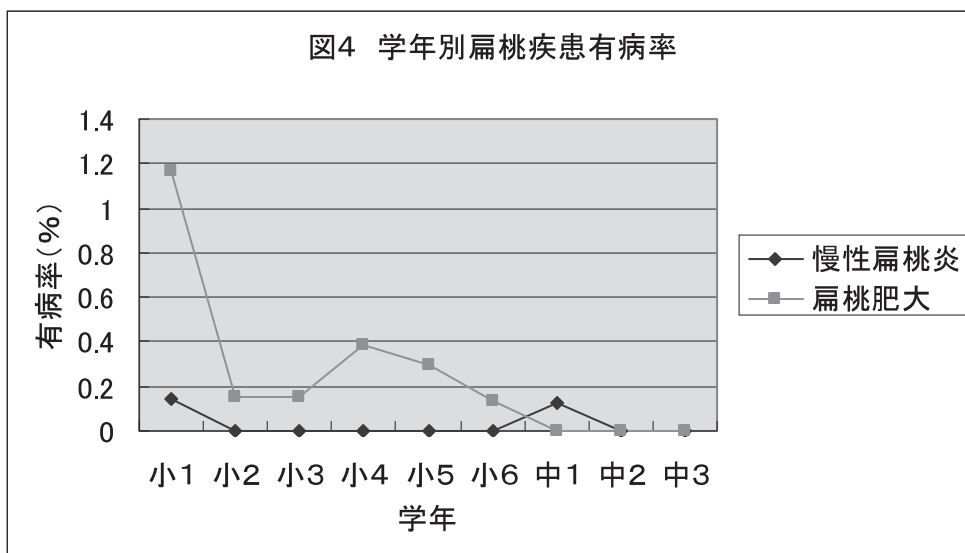


図3 学年別鼻疾患有病率





1. 副鼻腔炎外来 since 1994

副鼻腔炎外来では、好酸球性副鼻腔炎の術後治療や経過観察を中心に患者さんを診ています。平成22年6月からの診療日の変更に伴い、診察日を従来の木曜日を中心としつつも、加えて月曜日や火曜日（午後）も適宜受診日としています。木曜日の午後は、ポリクリの学生さんに、最近の鼻副鼻腔炎治療の問題点を理解してもらう機会としても重要な時間となっています。

今年は、好酸球性副鼻腔炎病態における真菌アレルギー、特にカンジダの関与に注目して、データを整理してみました。好酸球性副鼻腔炎では、アレルギー性鼻炎の合併する率が低いわりに、末梢血中の総IgE値が高いことは広く認められていますが、その機序についてはよくわかっていません。それに対する直接的な答えとしては、まだまだ明らかにしないといけない点は多々あるものの、少なくとも、カンジダに対する即時型アレルギー反応の陽性率（皮内テスト）が通常の副鼻腔炎、アレルギー性鼻炎など比べて有意に高いことがわかりました。一方で、アレルギー性真菌性副鼻腔炎（AFS; Allergic Fungal Sinusitis）の原因真菌として最も一般的なアスペルギルスに対する反応の陽性率（陽性率）はけっして高くありませんでした。今後、培養細胞、フローサイト等を用いた、human materialによる実験研究を並行して行なう必要があると思います。

臨床研究と基礎的な病態研究を並行して進めていくことは、臨床家として重要な研究スタイルであると考えます。今後、上記の結果を端緒として更に掘り下げた研究を進め、診断基準、予防、治療に生かすことができる研究としていきたいと思います。鼻副鼻腔、アレルギー関連学会や「気道粘膜における好酸球性炎症を考える会（SGEIRT）」での報告と論文作成を基本とした活動を継続していきたいと思います。

（文責：松根彰志）

2. 難聴・耳鳴り・補聴器外来

難聴・耳鳴り・補聴器外来

火・木曜日（午後）

2010年6月の完全予約制の導入に伴い、難聴・耳鳴り・補聴器外来は、上記曜日に、変更になりました。難聴・耳鳴り外来では、主に指向性カウンセリングと音治療を組み合わせた耳鳴り治療法 TRT（Tinnitus Retraining therapy）を中心に行っています。また、補聴器外来では、補聴器フィッティングから聴覚障害についての管理指導・患者啓蒙を行っています。2010年1～12月の新規患者数は、難聴・耳鳴り外来で8名、補聴器外来で14名と、昨年の約半数になりました。いずれも、頻回に受診する必要はないものの長期の管理が必要になることから、関連病院や患者さんの近医、かかりつけ医との連携をはかっていきたいと考えています。

（文責：宮之原郁代）

VIII. 病理集計

病理集計

2010.4月～2011.3月

入院

件数

432

外来

309

総施行件数

741

腫瘍疾患

	悪性	件	良性	件
喉頭腫瘍	SCC	23	hemangioma	3
			cavernous hemangioma	2
			papilloma	2
			schwanoma	2
甲状腺腫瘍	papillary carcinoma	5	adenomatous goiter	6
	不明	2	cyst	1
上咽頭腫瘍	SCC	1		
	lymphoepithelial carcinoma	1		
中咽頭腫瘍	SCC	15	squamous papilloma	6
	liposarcoma	1	papilloma	2
下咽頭腫瘍	SCC	25	squamous papilloma	3
舌腫瘍	SCC	11	papilloma	1
			fibroma	1
口腔腫瘍	SCC	2	granular cell tumor	1
口腔底腫瘍	SCC	5		
歯肉腫瘍	mucoepidermoid carcinoma	1		
軟口蓋腫瘍			pleomorphic adenoma	3
上顎腫瘍	adenoid cystic carcinoma	1	favor juvenile trabecular ossifying fibroma	1
	osteosarcoma	1		
篩骨洞腫瘍	不明	2		
鼻腔腫瘍	SCC	5	hemangioma	6
	adenocarcinoma	3	squamous papilloma	4
	adenoid cystic carcinoma	1	inverted papilloma	4
	malignant melanoma	2	pyogenic granuloma	1
耳下腺腫瘍	mucoepidermoid carcinoma	1	Warthin tumor	14
	adenocarcinoma	1	pleomorphic adenoma	9
	salivary duct carcinoma	1	lymphoepithelial cyst	2
			epidermal cyst	1
			cystadenoma	1
顎下腺腫瘍			hemangioma	2
			pleomorphic adenoma	2
			lymphoepithelial cyst	2
頸部腫瘍			schwanoma	1
			epidermal cyst	1
			cyst	1
			lipoma	1
外耳腫瘍	SCC	3	adenoma	1
皮膚腫瘍	dermatofibrosarcoma protuberances	1		
悪性リンパ腫 (non-Hodgkin)	diffuse large Bcell lymphoma	4		
	T lymphoblastic lymphoma	2		
	follicular lymphoma	1		
	Burkitt lymphoma	1		
	NK/Tcell lymphoma	1		
	病理分類不明	5		
合計		128		87

(平成23年3月現在)

文部科学省科学研究費

基盤研究(B)

舌下免疫 - 粘膜ワクチンの新たな投与経路としての有用性に関する研究

研究代表者 黒野祐一

分 担 者 松根彰志 吉福孝介 田中紀充 大堀純一郎

基盤研究(C)

経皮免疫による上気道粘膜免疫応答の誘導

研究代表者 田中紀充

早水佳子 (平成22年9月1日より代表者交代)

分 担 者 黒野祐一 松根彰志 早水佳子

宮下圭一 (平成22年9月1日より分担者追加)

基盤研究(C)

マクロライドによる「ステロイド減量効果」と難治性副鼻腔炎の新しい治療法の研究

研究代表者 松根彰志

分 担 者 黒野祐一 吉福孝介 大堀純一郎 砂塚敏明

若手研究(B)

好酸球性副鼻腔炎における好酸球活性化機序の解明

研究代表者 吉福孝介

1. 原 著

- (1) S.Matsune, MD, J.Ohori,MD, K.Yoshifuku,MD, Y.Kurono,MD
 「Effect of Vascular Endothelial Growth Factor on Nasal Vascular Permeability」
 The Laryngoscope 120(4):844-848,2010
- (2) 黒野祐一, 大堀純一郎, 松根彰志
 「上気道感染症に対するガレノキサシンの臨床効果」
 日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 28(1):25-29, 2010
- (3) 谷本洋一郎, 積山幸祐, 黒野祐一
 「上顎洞に生じたリンパ芽球性リンパ腫例」
 耳鼻臨床 103(9):819-824, 2010
- (4) 吉福孝介, 林 多聞, 大堀純一郎, 黒野祐一
 「繰り返す頸部腫脹を主訴とした縦隔清上皮腫例」
 耳鼻臨床103(11):1045-1050, 2010

2. 総 説

- (1) 黒野祐一
 特集：内科医のための耳鼻科疾患の診かたと治療
 1. 耳鼻科疾患をめぐる内科と耳鼻科の接点—専門医との医療連携を含めて—
 Progress in Medicine：30(4)：1015-1018, 2010
- (2) 黒野祐一
 特集 耳鼻咽喉科・頭頸部外科の検査マニュアル—方法・結果とその解釈
 IV. 鼻・副鼻腔炎の検査 3. 鼻アレルギー検査
 耳鼻咽喉科・頭頸部外科 82(5)増刊号：167-173, 2010

- (3) 松根彰志
特集・耳鼻咽喉科外来診療—私の工夫—
副鼻腔（上顎洞）穿刺
MB ENT 113:59-62, 2010
- (4) 松根彰志, 大堀純一郎, 林 多聞, 黒野祐一
特集・頭頸部癌診療のABC—診療所における基本戦略—
鼻副鼻腔癌 MB ENT 116:16-20, 2010
- (5) 松根彰志, 川島雅樹, 黒野祐一
特集・目で見える鼻の検査 嗅覚に関する検査 基準嗅力検査, 噴霧式基準嗅力検査
JOHNS 26(8):1113-1116, 2009
- (6) 松根彰志
特集・耳鼻咽喉科からみた喘鳴・喘息
アスピリン喘息の病態と随伴する耳鼻咽喉科疾患
MB ENT 118 別刷 :44-48, 2010
- (7) 黒野祐一
特集：お母さんへの回答マニュアル耳鼻咽喉科Q & A 2010/09/27
「鼻が悪くて通院していますが、スイミングは通わせてよいのでしょうか？」
JOHNS 26(9):1394-1395, 2010
- (8) 黒野祐一
医学用語解説 「鼻咽頭関連リンパ組織」
炎症と免疫18(5):97-99, 2010
- (9) 黒野祐一
特集：好酸球関連の病変 1. 好酸球総論
耳鼻咽喉科・頭頸部外科82(10):653-659, 2010
- (10) 松根彰志
「アレルギー性鼻炎治療における鼻用噴霧ステロイドへの期待」
耳鼻咽喉科展望 53補冊2:55-58, 2010

- (11) 松根彰志
「好酸球性副鼻腔炎の臨床と病態」
Otology Japan 20(3):247-256, 2010
- (12) 大堀純一郎, 黒野祐一
特集 耳鼻咽喉・頭頸部画像アトラス
口腔・咽頭・唾液腺 咽後膿瘍
JOHNS 26(3):409-410, 2010
- (13) 大堀純一郎, 黒野祐一
上顎骨(前頭骨を含む)・頬骨骨折
耳鼻臨床 20(2):81-85, 2010
- (14) 黒野祐一
Bedside Teaching 急性喉頭蓋炎
呼吸と循環 59(1):77-82, 2011
- (15) 黒野祐一
特集/安心・安全なステロイド療法 ステロイド療法の実際 耳鼻咽喉科疾患
臨床と研究 88(1):50-54, 2011
- (16) 黒野祐一
アレルギー性鼻炎 改訂第2版 第4章 管理・治療
薬物療法1. アレルギー性鼻炎用薬の特徴と治療選択
最新医学・別冊 新しい診断と治療のABC 12 127-133, 2011

3. その他

- (1) 大堀純一郎
何でも質問隊 どうして鼻血は出るの? 南日本新聞 平成22年4月25日
- (2) 吉福孝介
何でも質問隊 声変わりはなぜ起こるの? 南日本新聞 平成22年12月26日

(3) 早水佳子

紙上診察室 航空性中耳炎 南日本新聞 平成23年 3 月 8 日

4. 国内学会発表

(1) 特別講演

九州大学医学部臨床講義 平成22年 4 月 9 日 (福岡市)

「上気道の免疫・アレルギー疾患」

黒野祐一

八幡浜医師会 特別講演会 平成22年 4 月20日 (八幡浜市)

「アレルギー性鼻炎の診療における留意点」

黒野祐一

第21回沖縄県耳鼻咽喉科医会 講演会 平成22年 4 月22日 (那覇市)

「アレルギー性鼻炎と好酸球性副鼻腔炎の診断と治療」

松根彰志

熊本大学医学部臨床講義 平成22年 5 月12日 (熊本市)

「上気道疾患と粘膜免疫」

黒野祐一

大分大学医学部臨床講義 平成22年 6 月15日 (大分市)

「口腔・咽頭痛」

黒野祐一

平成22年度耳鼻咽喉科夏季臨床研究会 平成22年 7 月17日 (東京都)

「副鼻腔炎の各種病態とその治療」

黒野祐一

第497回大分県北部地区小児科医会 平成22年 8 月10日 (大分市)

「上気道炎症と粘膜免疫」

黒野祐一

平成22年度日本耳鼻咽喉科学会高知県地方部会 秋季学術集会

平成22年9月25日（高知市）

「急性上気道感染症の診療における留意点

－ニューキノロン系抗菌薬の位置づけ－」

黒野祐一

佐賀県耳・鼻・のどの感染症診療セミナー 平成22年10月28日（佐賀市）

「急性上気道感染症の診療における留意点

－ニューキノロン系抗菌薬の位置づけ－」

黒野祐一

大阪アレルギー性鼻炎フォーラム2010 平成22年10月30日（大阪市）

「アレルギー性鼻炎の薬物療法における留意点」

黒野祐一

横浜市耳鼻咽喉科医会学術講演会 平成22年11月17日（横浜市）

「急性上気道感染症の診療における留意点

－ニューキノロン系抗菌薬の位置づけ－」

黒野祐一

第257回北九州耳鼻咽喉科臨床懇話会 平成22年11月26日（北九州市）

「アレルギー性鼻炎・花粉症の診断と治療」

松根彰志

NAGOYA ENT セミナー2010 平成22年12月2日（名古屋市）

「アレルギー性鼻炎の薬物療法における留意点」

黒野祐一

大阪耳鼻科感染症ワークショップ 平成22年12月15日（大阪市）

「急性上気道感染症の診療における留意点

－ニューキノロン系抗菌薬の位置づけ－」

黒野祐一

第255回筑後耳鼻科カンファレンス 平成22年12月18日（久留米市）
「アレルギー性鼻炎治療における抗ヒスタミン薬の位置づけと新たな可能性」
黒野祐一

第1回新宿区アレルギー疾患治療学術講演会 平成23年1月18日（東京都）
「花粉症シーズン到来—どの薬を使う？それはなぜ？—」
黒野祐一

鼻炎治療 新時代への幕開け学術講演会 平成23年1月22日（大阪市）
「アレルギー性鼻炎・花粉症の最近の話題」～レボセチリジンを中心に～
松根彰志

日本耳鼻咽喉科学会広島県地方部会研修会 平成23年1月20日（広島市）
「アレルギー性鼻炎の薬物療法における留意点」
黒野祐一

荒尾市・玉名郡市医師会学術講演会 平成23年2月4日（玉名市）
「アレルギー性鼻炎の薬物療法における留意点」
黒野祐一

第37回埼玉喘息・アレルギー研究会 平成23年2月5日（さいたま市）
「アレルギー性鼻炎の治療における鼻噴霧ステロイド薬の位置づけ」
黒野祐一

南大阪アレルギーセミナー 平成23年2月12日（堺市）
「アレルギー性鼻炎におけるヒスタミンの作用機序と
第2世代抗ヒスタミン薬の役割」
黒野祐一

伊佐市医師会学術講演会 平成23年2月17日（伊佐市）
「アレルギー性鼻炎・花粉症の病態と治療」
松根彰志

第19回九州アレルギー講習会－福岡－ 平成23年2月19日（福岡市）

「アレルギー診療ガイドライン2010 耳鼻咽喉科」

黒野祐一

第1回埼玉西部・多摩北部耳鼻咽喉科研究会 平成23年2月24日（所沢市）

「アレルギー性鼻炎・花粉症の治療における抗ヒスタミン薬の位置づけ」

黒野祐一

三条市医師会学術講演会 平成23年3月4日（三条市）

「花粉症の診断と治療における留意点」

黒野祐一

(2) シンポジウム

第60回日本アレルギー学会秋季学術大会 平成22年11月25日～27日（東京都）

「VEGFをターゲットとした花粉症治療の可能性」

松根彰志

(3) パネルディスカッション

第22回日本アレルギー学会春季臨床大会 平成22年5月8日～9日（京都市）

「小児と成人の副鼻腔炎の違い―疫学と病態の観点から―」

松根彰志

(4) 公開座談会

第22回日本アレルギー学会春季臨床大会 平成22年5月8日～9日（京都市）

「上気道と下気道の関連～気道で何が起きているのか？」

黒野祐一

(5) ランチョンセミナー

第22回日本アレルギー学会春季臨床大会 平成22年5月8日～9日（京都市）

「鼻粘膜の炎症と点鼻ステロイド薬」

黒野祐一

「スギ花粉症に対する初期療法—鼻噴霧ステロイド薬の有用性も含めて—」

宮之原 郁代

第20回日本耳科学会総会・学術講演会 平成22年10月7日～9日（松山市）

「上気道粘膜の難治性好酸球性炎症の病態，治療とステロイド」

松根彰志

(6) 教育講演

第25回九州連合地方部会学術講演会 平成22年7月10日～11日（北九州市）

「好酸球性副鼻腔炎—最新の知見—」

松根彰志

(7) 一 般

第30回気道分泌研究会 平成22年4月3日（東京都）

「アレルギー性鼻炎の鼻汁中VEGFの病態上の意義」

原田みずえ，松根彰志，大堀純一郎，宮下圭一，牧瀬高穂，黒野祐一

第111回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会 平成22年5月20日～22日（仙台市）

「アレルギー性鼻炎におけるVEGFの意義」

松根彰志，吉福孝介，原田みずえ，大堀純一郎，黒野祐一

「スギ花粉症治療のヒスタミン受容体発現に及ぼす影響」

牧瀬高穂，松根彰志，宮之原郁代，黒野祐一

第34回日本頭頸部癌学会 平成22年6月10日～11日（東京都）

「頭部・顔面皮膚悪性腫瘍に対する頸部郭清術について」

大堀純一郎，宮下圭一，早水佳子，川島雅樹，林 多聞，黒野祐一

第5回日本小児耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会 平成22年6月26日～27日（札幌市）

「鼻内視鏡下に経上顎洞で手術治療を行った若年性血管線維腫の1症例」

宮下圭一，大堀純一郎，黒野祐一

第72回耳鼻咽喉科臨床学会総会・学術講演会 平成22年7月2日～3日（倉敷市）

「繰り返す頸部腫脹を主訴とした上大静脈症候群の1症例」

吉福孝介, 黒野祐一, 林 多聞, 大堀純一郎

「嗄声を主訴と下皮膚粘膜ヒアリノーシスの症例」

早水佳子, 松根彰志, 黒野祐一

第25回九州連合地方部会学術講演会 平成22年7月10日～11日（北九州市）

「肺炎球菌の咽頭上皮接着における Poly(I:C)の関与」

川畠雅樹, 黒野祐一

「扁桃周囲膿瘍のCT画像所見の解析」

馬越瑞夫, 大堀純一郎, 黒野祐一

第9回鹿児島めまい研究会 平成22年7月15日（鹿児島市）

「純音聴力閾値に左右差のない聴神経腫瘍の検討」

宮之原郁代, 川畠雅樹, 牧瀬高穂, 馬越瑞夫, 早水佳子, 黒野祐一

第17回マクロライド新作用研究会 平成22年7月16日～17日（東京都）

「EM900とモメタゾンによる Eotaxin, VEGF 産生抑制効果について」

松根彰志, 吉福孝介, 原田みずえ, 大堀純一郎, 黒野祐一

第49回日本鼻科学会総会ならびに学術講演会 平成22年8月26日～28日（札幌市）

「当科における鼻性眼窩内合併症の検討」

吉福孝介, 馬越瑞夫, 大堀純一郎, 黒野祐一

「慢性副鼻腔炎に対するカルボシステインの効果」

原田みずえ, 松根彰志, 黒野祐一

第40回日本耳鼻咽喉科感染症研究会 第34回日本医用エアロゾル研究会

平成22年9月3日～4日（名古屋市）

「肺炎球菌上皮接着における Poly(I:C)の関与」

川畠雅樹, 黒野祐一

「扁桃周囲膿瘍のCT画像とその臨床的特徴」

馬越瑞夫, 大堀純一郎, 黒野祐一

第23回日本口腔・咽頭科学会総会学術講演会 平成22年9月16日～17日（東京都）

「当院における IgA 腎症の治療成績（口蓋扁桃摘出術の効果について）」

早水佳子，黒野祐一

「当科の若年性血管線維腫症例の手術アプローチについて」

宮下圭一 大堀純一郎，黒野祐一

第20回日本耳科学会総会・学術講演会 平成22年10月7日～9日（松山市）

「H I V感染に合併した内耳梅毒の一例」

宮之原郁代，宮下圭一，黒野祐一

第62回日本気管食道科学会ならびに学術講演会 平成22年11月4日～5日（別府市）

「下咽頭血管腫の2例」

永野広海，馬越瑞夫，原田みずえ，大堀純一郎，黒野祐一

第4回九州頭頸部癌フォーラム 平成22年11月27日（福岡市）

「咽喉食摘後のDP皮弁再建トラブル症例」

大堀純一郎，吉福孝介，馬越瑞夫，黒野祐一

第60回日本アレルギー学会秋季学術大会 平成22年11月25日～27日（東京都）

「スギ花粉非飛散期の鼻誘発反応に対するプラナルカストの効果」

牧瀬高穂，松根彰志，黒野祐一

第21回日本頭頸部外科学会総会ならびに学術講演会 平成23年1月27日～28日（宇都宮市）

「軟骨部外耳道腫瘍に対する術式の検討」

大堀純一郎，早水佳子，原田みずえ，牧瀬高穂，吉福孝介，松根彰志，黒野祐一

「当院で経験した視神経管骨折例」

積山幸祐，指宿宏英，駿河保彰，黒野祐一

第29回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会 平成23年2月10日～12日（大分市）

「好酸球性副鼻腔炎における1型アレルギー反応の関与とその意義」

松根彰志，吉福孝介，原田みずえ，早水佳子，大堀純一郎，黒野祐一

「スギ花粉非飛散期における鼻誘発反応とプラナルカスト前投与の効果」

牧瀬高穂，松根彰志，黒野祐一

第23回気道病態研究会 平成23年3月5日（東京都）

「鼻誘発反応に対するプラズマカスチンの好酸球浸潤抑制効果」

牧瀬高穂

第41回日本嫌気性菌感染症研究会学術集会 平成23年3月11日～12日（西宮市）

テーマ：嫌気性菌感染症の治療戦略

教育セミナー

「座談会：耳鼻咽喉科および口腔外科における深部感染症に対する考え方」

大堀純一郎

5. 国際学会発表

ERS&ISIAN 2010 23th Congress of the European Rhinologic Society

29th International Symposium of Infection & Allergy of the Nose

Geneva June 20–24, 2010

「Relationship between H1R mRNA expression levels and sensitivity in human nasal mucosa」

T.Makise, J.Ohori, Y.Kurono

第7回国際扁桃・粘膜免疫シンポジウム：The 7th International Symposium on Tonsils and Mucosal Barriers of the Upper Airways (ISTMB) Asahikawa July 7–9, 2010

「Image analysis of peritonsillar abscess by computed tomography」

J.Ohori, M.Umakoshi, T. Hayashi Y.Kurono

「Pretreatment of epithelial cells with poly(I:C) enhances the adherence of Streptococcus pneumoniae」

M.Kawabata, Y.Kurono

13th Korea Japan Joint Meeting of Otorhinolaryngology, Head and Neck Surgery

Seoul, Korea September 9–11, 2010

「Mucosal Immunology and Its Application for Preventing Upper Respiratory Infection」

Y.Kurono

「Computed Tomography Image Analysis of Peritonsillar Abscess」

J.Ohori, M.Umakoshi, Y.Kurono

Sixth International Symposium on Meniere's Disease and Inner Ear Disorders Kyoto, Japan, 2010 November 14-17, 2010

〔Clinical Aspects of Three Cases of Cochlear Nerve Deficiency〕

I.Miyanohara, **K.Miyashita**, **M.Harada**, **Y.Kurono**

2011 Seven Departments (Japan-Taiwan-Korea) Joint Meeting of Otorhinolaryngology Suwon, Korea March 25-27, 2011

〔Image analysis of peritonsillar abscess by computed tomography Kagoshima Univ.〕

J.Ohori, **M.Umakoshi**, **T.Hayashi**, **Y.Kurono**

〔Clinical investigation of 95 patients with acute epiglottitis Kagoshima Univ.〕

K.Yoshifuku, **K.Miyashita**, **J.Ohori**, **Y.Hayamizu**, **Y.Kurono**

1. 医局人事（平成23年4月現在）

教 授	黒野祐一
講 師	吉福孝介, 大堀純一郎
助 教	早水佳子, 原田みずえ, 宮下圭一, 永野広海
医 員	川島雅樹, 牧瀬高穂, 馬越瑞夫
大学院生	川島雅樹, 牧瀬高穂, 永野広海

医 局 長	大堀純一郎
外来医長	原田みずえ
病棟医長	宮下圭一

関連病院（平成23年4月現在）

鹿児島医療センター	西元謙吾
国立療養所星塚敬愛園	宮之原郁代
県立大島病院	休診
鹿屋医療センター	休診
済生会川内病院	休診
鹿児島生協病院	積山幸祐
藤元早鈴病院	森園健介
あまたつクリニック	谷本洋一郎
鹿児島市立病院	高木 実

2. 学会報告

第30回 気道分泌研究会

原 田 みずえ

H22年4月3日、東京にて開催された第30回気道分泌研究会に、松根准教授とともに参加させていただきました。昨年は初参加でしたので、どんな研究会なのか少し心配でしたが、今回は2回目だったので、少し気が楽ではありました。

私は、「アレルギー性鼻炎鼻汁中 VEGF の病態上の意義について」と題して、発表させていただきました。アレルギー性鼻炎患者の下鼻甲介粘膜由来の培養線維芽細胞を、VEGF で刺激後、①VEGF の産生亢進が見られるか、②さらに、抗 VEGF 受容体 1 抗体、および、抗 VEGF 受容体抗体 2 により VEGF の産生抑制がみられるか、検討を行いました。鼻汁中の VEGF は、主に粘膜上皮細胞の受容体 2 に結合し、VEGF が産生されると、線維芽細胞では、主に、受容体 1 に結合することが考えられ、さらに線維芽細胞は、自ら VEGF を産生し、autocrine 的に作用したり、血管内皮細胞に作用したりして、さらに血管透過性を亢進させているのではないかという結論に至りました。この時はアレルギー性鼻炎の下鼻甲介粘膜からの線維芽細胞を用いた実験、研究でありましたが、現在、慢性副鼻腔炎の鼻茸由来の線維芽細胞を用いた研究を行っており、成果を出していこうと思っています。

その他、前回、イジブラスト（ケタス®）が、気道分泌亢進と喀痰喀出障害に対し有効であるという発表があり、印象に残っていましたが、今回、またその研究の続きの発表があり、イジブラストが粘液遺伝子 MUC5AC の発現を mRNA レベルで抑制したと報告されていました。こういう研究会に毎回出席していると、このように気になった発表の続きが聞くことができるのがいいなと思いました。

第111回 日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会

牧 瀬 高 穂

平成22年5月20日から22日の3日間、仙台で行われた第111回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会に黒野教授、松根准教授、私の3人で参加いたしました。私は同年の夏に専門医試験を控えていたので、あらゆるシンポジウムや講演を直前講習のつもりで聴いて回り、大変良い勉強になりました。その甲斐あってか、専門医試験は無事に合格で

きました。「スギ花粉症治療のヒスタミン受容体発現に及ぼす影響」の演題で口演しましたが、多数の貴重な意見をいただき、今後の参考となり有意義な学会でした。学会終了後は牛タンを食べ、三陸の海の幸をいただき、おなかも充実した学会でした。

第34回日本頭頸部癌学会

大 堀 純一郎

本学会は、平成22年6月10日から11日まで、東京の京王プラザホテルで開催された。当科からは、黒野教授と私大堀の2名で参加した。本学会の前日にはこれまで、頭頸部手術手技研究会が開催されていたが、今回から第1回日本頭頸部癌学会教育セミナーとして新たな形でのセミナーが開催された。本セミナーでは、今回、1総論、2下咽頭癌、3口腔癌が取り上げられたが、今後数年をかけて全領域の講演を行うように計画されているようである。シンポジウムでは、表在癌の取り扱いが取り上げられた。近年内視鏡の発達により、上部消化管内視鏡検査時に耳鼻咽喉科領域の微小癌が発見されることが多くなってきており、今後の頭頸部癌診療に必須の項目となってくると思われた。今回の学会では緩和ケアも大きく取り上げられていた。頭頸部癌のターミナルでは、他の領域に類を見ないようなQOLの低下を招く。頭頸部癌の治療戦略として、早期がんの発見と治療、緩和ケアの充実という方向に向かっているように感じた。

第5回日本小児耳鼻咽喉科学会

宮 下 圭 一

平成22年6月26日から27日に札幌医科大学耳鼻咽喉科主催で開催された第5回日本小児耳鼻咽喉科学会および学術講演会に黒野教授と私の2人で参加しました。私は「鼻内視鏡下に経上顎洞で手術治療を行った若年性血管線維腫の1症例」という演題で、腫瘍をen blocで摘出する際の内視鏡の有用性について発表させて頂きました。またシンポジウムでは小児睡眠時無呼吸症候群の診断と定義や、影響、治療についてや、主催が札幌医科大学であったことから、ワークショップでは扁桃の免疫機構と病態と題して扁桃とIgA腎症やEBV感染、抗原提示経路としての扁桃上皮の役割などととても興味深く、勉強になりました。6月という鹿児島は梅雨の時期でしたが、札幌はさわやかな天気です。学会の合間に美味しいものも味わうことができました。

第72回耳鼻咽喉科臨床学会総会・学術講演会

早水佳子

平成22年7月3日から2日間にわたり、第72回耳鼻咽喉科臨床学会総会が川崎医科大学のもと、岡山県倉敷芸文館にて開かれました。

今回のテーマは、「臨床医が知らなければならない最新医学」と題して、我々医師が十分な時間を費やして修得できないものを短時間に集約し、「知らなければならない最新の知識」として講演して頂きました。

また、耳科学のテーマとして「突発性難聴のトピックス」と題して、病態・診断・治療の進歩に関して学びました。他には、人工内耳の展望について教えて頂きました。

学会開催地であるこの倉敷市は、江戸中期から約300年間幕府の直轄領で、非常に文化密度の濃い町としても知られています。大原孫三郎氏によって設立された我が国最初の常設西洋美術館である大原美術館も近くにありました。学会がてら、美術館に足を延ばされる先生もいらっしゃいました。残念ながら、私は行けなかったのですが、その分、特別講演で理事長である大原健一郎氏のお話を聞くことが出来ました。学術の他に、文化的な一面も学ぶことが出来た有意義な学会でした。

第25回九州連合地方部会学術講演会

馬越瑞夫

7月10日及び11日の両日に渡って、小倉にて開催された九州連合地方部会に参加した。7月9日の行きはバスで、少人数ながらほろ酔い気分での遠征となった。

7月10日は朝より野球の大会が催された。1回戦での惜敗であったが、一発逆転の好機に当科随一の好打者（代打の切り札）松根准教授がヒットを放つも、1塁ベース直前で足がつってしまうというアクシデントがあり、過ぎゆく夏のまぶしさに涙した。なお松根先生はその夜の教育公演で発表されたが、足を引きずった姿がなおも痛々しかった。翌日は一般口演が執り行われたが、私は自分が口演予定であったため前後の記憶は定かではない。しかし“咽頭”のセッションは市立病院の林先生、当科の川島先生の口演も含まれており、皆様のおかげでどうにか乗り切ることができた。その後はそそくさと会場を後にし、ビールも飲めず当直のため、林先生、大堀先生とJRで帰鹿することと相成った。

第40回日本耳鼻咽喉科感染症研究会・第34回日本医用エアロゾル研究会

馬 越 瑞 夫

9月3日及び4日に名古屋にて開催された感染症研究会に参加させていただいた。私は全国規模の発表が初めてであったため、余裕もなくいささか記憶も曖昧である。

9月2日夜飛行機で川島先生と名古屋入り、半ば自棄気味に飲んで吞んで手羽先を漁った。そして9月3日会場入りしたが、名だたる先生方の登場、そして私が発表する少し前の発表者に対する容赦ない質問もあり、“あっ、やべえ。何も答えれんぞ。でもええか。”となぜか諦めの境地へと昇華してしまった。で、よくは覚えていないが、無事(?)発表を終えることができた。教授からも一言激励され、気持ちを新たにした。その後、川島先生の発表を拝聴、夜の懇親会を経て、手羽先第2弾⇒福岩先生合流後に魅惑のガンダムバーへと繰り出した。

9月4日は福岩先生の発表を拝聴、そして黒野教授司会のエアロゾルシンポジウムに参加した。教授はいつにもまして生き生きと、そして光輝いていた。

こうして最初で最後になるかもしれない私の全国発表は大円団と相成った。

第23回日本口腔・咽頭科学会

宮 下 圭 一

平成22年9月16日から17日にかけて、東京新宿の京王プラザホテルで日本大学医学部耳鼻咽喉科頭頸部外科学分野主催の第23回日本口腔・咽頭科学会に黒野教授と早水先生、私の3人で参加いたしました。早水先生は「当院におけるIgA腎症の治療成績（口蓋扁桃摘出術の効果について）」という演題で、私は「当科の若年性血管線維腫症例の手術アプローチについて」という演題で発表させていただきました。特別講演では「霊長類の脳内味覚伝導路と大脳皮質味覚野」や、「耳管と上咽頭：その構造と機能－耳管、耳管周囲組織、ならびにローゼンミュラー窩の立体的位置関係と機能的役割－」という内容で、耳管の立体的構造、位置関係、解剖、機能などをわかりやすく、そして耳管開放症の組織学的な異常などについてとても興味深く学ぶことができました。

第23回日本口腔・咽頭科学会

早水佳子

平成22年9月16日から2日間にわたって、日本大学医学部耳鼻咽喉・頭頸部外科学分野のもと、京王プラザホテルで開催されました。口腔・咽頭の領域はもとより、その隣接臓器である胃・食道にも視野を広げ、胃食道逆流症に関連して咽喉頭逆流症、扁桃炎などの炎症や免疫、感覚器としての味覚、嚥下などの運動障害、睡眠時無呼吸症、腫瘍と実に幅広い分野でプログラムが組まれました。ホテルを会場としているので、色々な演題を聞くに際し、他の会場への移動が簡便で、興味のある演題をすぐに場所を変わっては沢山聞くことが出来ました。

特別講演としては、中枢の問題を取り入れ、熊本大学名誉教授の小川 尚先生の「霊長類の脳内味覚伝導路と大脳皮質味覚野」という難しい問題で行われました。まだまだ不明点の多い味覚の生理についてのお話でした。

私事としては、ギリギリまで仕事をして、飛行機に飛び乗り、おまけに、予定通りに着陸とならず、挙句には、フロントは外国の方で大渋滞となっており、長時間の順番待ちでのチェックインとなりました。夜も0時を回ろうかという頃にやっと新宿という大都市のホテルに入ることが出来たのを覚えています。

第49回 日本鼻科学会

原田みずえ

H22年8月26日～28日に、札幌で開催された第49回日本鼻科学会に、黒野教授、松根准教授、吉福先生と私の4人で参加させていただきました。

私は、「慢性副鼻腔炎におけるカルボシステインの効果」と題して、発表させていただきました。臨床では、すでに古典的な感染型の慢性副鼻腔炎に対する、マクロライドとムコダインの併用療法が普及していますが、実際、線維芽細胞レベルで、ムコダインのadd on効果が認められるのか、実験、研究を行ってきました。黒野教授、松根准教授の御指導により、なんとか形にして発表できたものの、実際のヒトの細胞を使った実験は思うようにいかないものなんだなあとつくづく思い知らされました。

初日のイブニングシンポジウムでは、フィンランドのタンペレ大学のマルクス先生がEUにおけるアレルギー性鼻炎の治療についてのお話をされました。マルクス先生は、若かりし頃に、我々の教室に留学でこられていたとのことで、学会の最終日には、札幌から鹿児島にきていただき、城山で講演をしていただきました。このようなことはまた

とない機会でも、マルクス先生も非常に鹿児島が懐かしかったのではないかと思います。またマルクス先生が留学で来られていた時を知っている先生方も、懐かしかったのではないかと思います。その他、学会中は、ESSの手技のビデオセミナーを見たり、最近、注目を浴びている頭頸部癌に対する重粒子線のセミナーを見たりして、大変勉強になり、充実した時間を過ごすことができました。

今回、札幌が会場で、北海道に行ったことがなかったので、学会の合間に、小樽まで足をのばし、オルゴール堂や小樽運河を回ることができ、とても癒され帰ってきました。また、上野先生には、すすきなので、大変おいしくて高級なお寿司屋さんで御馳走していただき、とてもいい思い出になりました。ありがとうございました。



第20回日本耳科学会総会・学術講演会に参加して

2010年10月7日(木), 8日(金), 9日(土)

ひめぎんホール(愛媛)

宮之原 郁 代

今回は特に、小川郁先生が司会をされた、パネルディスカッション1「鼓室内注入療法で感音難聴が治せるか?」を聞きたいと思っていたので、初日から参加しました。急性感音難聴に対しての鼓室内注入療法については、以前から興味を持っていて、鹿児島大学でも、取り入れることはできないかと考えていたのですが、実際にやるとなると、注入の回数や方法、マンパワーの問題、また、地方部会の先生方のご協力など(高圧酸

素療法を目的に紹介されてくる患者さんが多いので。) 検討あるいは調整すべき点も多く、なかなか具体化できなかったのが現状です。今回のパネルでは、検討すべき問題点、メリットなどいろんな角度から、話を聞くことができるとても良かったと思います。鼓室内注入療法は、高濃度のステロイドをダイレクトに投与できるという点から、患者さんにとっても大きなメリットが見込めますし、将来性も高いので、今後、施設の実情にあった形で導入していければと思っています。自分の発表は、「HIV 感染に合併した内耳梅毒の一例」というタイトルで口演しました。質問もたくさん頂き、興味を持って頂けたようでした。

さて、松山は初めて訪れましたが、市電が走り、鹿児島と雰囲気似ています。道後温泉には、入りませんでした。「千と千尋の神隠し」のモデルになったといわれているだけあり、趣がありました。ただ、鹿児島—松山便は、1日1便(JAL)しかなく、アクセスに苦労しました。(ちなみに、福岡乗り換えで、朝1便の7時台の福岡行きにりましたが、乗り継ぎが悪く、ランチョンセミナーに間にあいませんでした。)鹿児島に住んでいると、どこに向かうにしても、時間もお金もかかり大変です。しかし、実際学会で、講演を聴くといろいろ勉強になり、情報量も多い気がしますし、なにより、直接、いろんな先生方とお会いできる機会でもありますので、また次回も参加できればと思います。

第60回 日本アレルギー学会秋季学術集会

牧 瀬 高 穂

平成22年11月25日から27日の3日間、東京で行われた第60回日本アレルギー学会秋季学術集会に黒野教授、松根准教授、私の3人で参加いたしました。私は「スギ花粉非飛散期の鼻誘発反応に対するプラズマカストの効果」の演題でポスター発表をしました。ポスターの前にあるモニターを使用して、ポスターの要点をスライドで発表するという初めての形式でした。質問者との距離が近く、より積極的な意見交換ができ、なかなか良い方法であると感じました。学会全体では下気道疾患や皮膚疾患の演題が多く、上気道アレルギー疾患の発表が少ないことが気になりました。多忙とはいえ、我々も他科のように、もっと積極的に学会活動をしなければいけないのではと感じました。学会会場から宿泊していた宿に帰る途中、東京宝塚劇場の前で、出待ちのファンの多さとそのマナーの良さ(全員が沿道に数列に並んで座って、決して立ち上がったたり歌劇団員を追いかけたりはしない)に驚きました。日本人の奥ゆかしさを感じるとともに、小心者の私はその集団の反対側を遠巻きに通って、毎日宿に帰りました。

第62回 日本気管食道科学会総会

永野 広海

第62回日本気管食道科学会総会が平成22年11月4日から5日まで大分県別府市にて開催され、当教室からは黒野教授と永野が参加させていただきました。

黒野教授はワークショップ『喉頭アレルギーの診断と治療』の座長をされ、わたしは、『下咽頭血管腫の2例』をポスター発表させていただきました。

境界領域である気管、食道、下咽頭に関して、耳鼻科のみならず外科、消化器科からの演題もあり多方面からの活発な討論が聞けて大変参考になりました。特にパネルディスカッションの『咽頭・食道表在癌の新しい診断と治療』とシンポジウム『進行咽頭・頸部食道癌に対する治療戦略』は大変参考になりました。頭打ちの下咽頭癌の予後を改善を目指すのは当然ではありますが、早期発見の重要性を再認識しました。

学会の開催された11月は大変すごしやすい時期で、帰路のやまみハイウェイから見る九重連山の紅葉は非常にきれいで、学会のつかれを癒してくれました。

第4回九州頭頸部癌フォーラム

大堀 純一郎

本フォーラムは、平成22年11月27日に福岡で開催された。当科からは、永野先生と大堀が参加した。本フォーラムは毎年、九州各施設の頭頸部癌患者の治療難渋した症例をカンファレンス形式で発表、討論する会である。九州各地の頭頸部癌を扱う施設から耳鼻咽喉科だけでなく、形成外科、放射線科が集まり、頭頸部癌治療について活発な討論を行っている。当科からは、下咽頭癌咽喉食的術後のDP皮弁壊死症例を提示し、形成外科の先生からたくさんの意見を聞くことができ非常に参考になった。当院には形成外科がないため、このような場で、形成外科の先生の貴重な意見を聞けるのは非常にためになった。各施設ともに、頭頸部癌患者の手術治療に工夫を凝らしており、その苦勞が伺えるだけに今後の参考になる非常に良い機会であった。

第21回日本頭頸部外科学会

大 堀 純一郎

本学会は、平成23年1月27日、28日の2日間、宇都宮市で開催された。当教室からは黒野教授と生協病院の積山先生、大堀の3人が参加した。頭頸部外科学会は、近年の外科医不足のあおりを受け、昨年ほどから教育ビデオセミナーとして、若手医師の手術手技指導のようなビデオセミナーを開催しており、今回のビデオセミナーも基本的なことから再度おさらいするような非常に良い機会であった。また昨年からは始まった頭頸部がん専門医制度に関するシンポジウムも開催され、頭頸部がん専門医必修のビデオ講座も今回から新たに加わっていた。一般演題も多く非常に活気にあふれていたが、私個人は、感冒のため非常に体調が悪く、せっかく餃子の町宇都宮に来たというのに、一つも餃子を食べることなく宇都宮を後にしてしまった。非常に残念であった。

第29回 日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会

牧 瀬 高 穂

平成23年2月10日から12日の3日間、大分で行われた第29回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会に黒野教授、松根准教授、私の3人で参加いたしました。私は「スギ花粉非飛散期における鼻誘発反応とプラシルカスト前投与の効果」の演題でポスター発表を行いました。多くの先生方から意見をいただき、今後の参考となる有意義な発表でした。本学会期間中に黒野先生が本学会の理事長に再任され、医局員として大変喜ばしいでした。同じ九州で開催された学会だったので自家用車で行ったのですが、帰りは寒波の影響で雪が降り、高速道路が通行止めとなり、一般道を阿蘇経由で帰る羽目となり、つるつる滑りながら熊本経由で8時間かけて帰ってきました。大分は遠いです。

第41回 日本嫌気性感染症研究会

大 堀 純一郎

本研究会は平成23年3月11日から3月12日にかけて兵庫医科大学平成記念会館にて開催された。本研究会には私大堀が参加した。私は本研究会において、初めて教育セミナーというセッションでの大役を賜った。藤田保健衛生大学の鈴木賢二教授座長のもと、「耳鼻咽喉科および口腔外科における深頸部感染症の考え方」と題して、耳鼻咽喉科側から私が、口腔外科側からいわき市立総合磐城協立病院 歯科口腔外科の内藤博之先生が発表し、3人でディスカッションする予定であった。ところが、3月11日は東北地方太平洋沖地震があった。私は鹿児島空港を出発する際には、なぜ地震の震源地に近づかなければならないのか不安でいっぱいであった。前日の打ち合わせ会場に到着すると、福島県から来られる予定の内藤先生は、会場に来られるはずもなく、電話での連絡もつかない状態である。本教育セミナーは、鈴木先生と私の2人で行うこととなった。当初20分のプレゼンテーションのはずが、前日の打ち合わせで、急遽1時間の講演となったのである。初めて賜った講演が、1時間持たせなくてはならなくなり、非常に不安であったが、そこは鈴木先生の名座長の仕切りにより、何とか1時間という時間を演台の上で過ごすことができた。鈴木先生に助けていただき、感謝の気持ちでいっぱいであった。非常に貴重な経験をさせていただき私自身も少し成長できたのかもしれない（ただ単に何とかなるんじゃない？という度胸がついただけかもしれないが）。最後に東北地方太平洋沖地震の被災者の方々のご冥福とお見舞いを申し上げます。

3. 国際学会発表

The 23rd Congress of the European Rhinologic Society (ERS) and the 29th International Symposium of Infection and allergy of the Nose (ISIAN)

牧瀬 高穂

平成22年6月20日から5日間、スイスのジュネーブで行われた The 23rd Congress of the European Rhinologic Society (ERS) and the 29th International Symposium of Infection and allergy of the Nose (ISIAN) に黒野教授，私，地村君（今年卒業し2年後に耳鼻科入局予定！）の3人で参加いたしました。

学会は United Nations の本部近くにある会議場で開催され，cadaver を用いた手術ライブなどがあり，大変興味深いものばかりでした。私の発表は「Pretreatment with Pranlukast reduces the infiltration of eosinophils into nasal mucosa of patients with Japanese cedar pollinosis」の演題でポスター発表でした。教授の英語口演を初めて聞きましたが，さすが教授だと改めて尊敬しました。自身の英語力を鍛えねばと痛感しました。

滞在中にマッターホルンとモンブランに行きました。マッターホルンはいにくの天気で見ることができませんでしたが，モンブランは天候にも恵まれ，ヨーロッパアルプスを満喫することができました。富士山より高い展望台でワインを飲んでいた教授と私は，低酸素に強いことが判明しました。

（文責：牧瀬）



第7回 国際扁桃・粘膜免疫シンポジウム

川 島 雅 樹

第7回国際扁桃・粘膜免疫シンポジウムが平成22年7月7日～9日にかけて、北海道旭川市で開催されました。当教室からは黒野教授、大堀先生、私の3人が参加致しました。大堀先生が、扁桃周囲膿瘍のCTにおける膿瘍の形態についての検討を、私が自身の研究テーマである肺炎球菌の上皮接着についての検討を発表致しました。

私自身にとって、初めての国際学会での発表でした。発表の間は、拙い英語を必死に話しながら、一方で、顔が紅潮し、背中にじわりと汗が滲むのを感じておりました。

シンポジウムでは、上気道感染症における興味深い基礎研究が討論されていましたが、聞きとることに必死で、決して十分な理解は得られたわけではありませんでした。その一方で、英語での質問、討論をこなされる先生方の姿がうらやましく、かつ、自分もあのように質問してみたいという思いに駆られました。しかし、その思いも束の間、帰ってきてからというもの、すっかり英会話学習はおざなりとなってしまっています。今後の国際学会での発表にむけて、「再度、心機一転、学習していこう。」と、この文を書きながら思っていました。臨床でも基礎研究でもそうであるように、英語の勉強も継続することが重要なのだと思います。せめて、この文が印刷され、自分の手元に届き、眼を通しているとき、英会話学習が継続できていることを願いつつ、この文を閉じます。

13th Korea Japan joint meeting

大 堀 純一郎

本学会は、2010年9月9日から11日まで韓国のソウルで開催された。当科からは黒野教授と大堀が参加した。黒野教授は粘膜免疫の special lecture を担当した (Fig.1)。私は扁桃周囲膿瘍のCT画像分析について発表した (Fig.2)。当地では、当科に留学された朴先生も参加されており、久しぶりにお会いできて楽しい



Fig.1



Fig.2

ひと時が過ぎせた。また、当科の田中先生が東京大学の清野研究室に国内留学中に、一緒だった金先生 (Fig.3) にもお会いできた。両先生ともに、田中先生が開業されるニュースをご存じで、田中先生が開業するのか？ どうして？ と田中先生が開業されることを不思議がっている様子であった。

韓国は学生時代に一度遊びに行ったことがあり、十数年ぶりであったが当時と変わらず非常に活発な元気な国であるように感じた。懇親会では、韓国の伝統舞踊 (Fig.4) や、現代アートの創作ダンス (Fig.5) などに触れることができた。

やはり、海外は日本と比べると非常に居心地が悪いことに変わりはないが、韓国の先生にも知り合いが出来てきて活動の場が広がっていくことを感じた。今後も広く活動するためには、英語を何とかしなければ・・・との思いに駆られた。



Fig.3 質問者 金先生とその後ろに顔半分移っている朴先生



Fig.4



Fig.5

Sixth International Symposium on Meniere's Disease and Inner Ear Disorders に参加して

November 14 (Sun) - 17 (Wed), 2010
Kyoto International Conference Center, Kyoto, Japan

宮之原 郁 代

International Symposium on Meniere's Disease and Inner Ear Disorders は、その名のとおりメニエール病と内耳障害に焦点をあて、この領域の基礎から臨床まで、最新の知見を含めたクオリティの高いプログラムを提供するミーティングです。宝ヶ池の木々が色づき始めた京都で、初めて日本で開催されました。私は、前回2005年にロサンゼルスで開催されたときに、黒野教授とともに、はじめて参加し、今回は2回目です。当初、毎年開催されるのかな?とっていたのですが、そうではなく、数年に1回開催されているようです。プログラムからいっても、内容が非常に充実しているのです、やはり数年スパンの開催になるのだらうと思われます。basic science については、普段なかなか接する機会がないので、いくつか聞くチャンスがあって良かったと思います。もちろん、すべて理解できるわけではありませんが、臨床医の立場から聞いて、とても興味深いものもあり、これからの臨床研究に生かしていければと思っています。

そのほかに、ちょっと特殊なものとしては、メニエール病に対する治療としての vestibular implant というアイデアが、ランチョンセミナーで取り上げられていて興味深く感じました。すでに、人への応用がなされビデオで、手術ならびに術後の患者さんの状態が紹介されました。多くの参加者も興味を持ったようで、会場からも多くの質問がありました。

今回は1人で参加していたので、はじめは、はっきり言って寂しかったのですが、前回ロサンゼルスでお会いした先生方とも再会することができ、とてもうれしかったです。また、ミーティングの合間や、ランチ、パーティでは、新しい知人と知り合うことができ楽しい時間を過ごすことができました。各国の子育て事情や日本女性の印象、食べ物、おみやげ（日本のカリグラフィーを集めている方もいて、日本文化にかなり興味を持っているのだなと思いました。おみやげにユニクロも人気だったようです。）など、学問とは関係ないですが、外から見た日本も垣間見えて楽しかったです。次回は、イタリアでの開催が予定されています。

2011年 Seven Departments (Japan-Taiwan-Korea) Joint Meeting of Otorhinolaryngology に参加して

吉 福 孝 介

Seven Departments (Japan-Taiwan-Korea) Joint Meeting of Otorhinolaryngology は、3月25日～27日に韓国の Suwon で開催されました。今回黒野教授、大堀先生、医局からは、片平さん、大夫堀さん、それと自分吉福が参加させていただいた。鹿児島空港から90分ほどでインチョン空港に到着し、そこからバスで1時間ほどで開催場所に到着しました。到着は16時ごろであり、Welcome party まで多少の時間があつたため、自分に御付き合いいただき、地元のショッピングセンターにみんなで買い物に出かけました。(自分の子供が韓国の駒がほしいとのことで探した。)しかし目的の駒はなく、買えませんでした。翌日は学会終了後に寺院などの観光を行いました。そこの古いしなびた土産屋で念願の駒を購入しました。非常に探していたものだけに、見つけた時は大変うれしく思いました。翌朝第一便で鹿児島に帰りました。韓国での Welcome party, Banquet はとても素晴らしい場所、食事でありました。そちらも十分に満喫させていただきましたが、その後の地元の食堂(従業員は中学生と思われる)でも十分満足させていただきました。



世界文化遺産の華城にて

4. 関連病院便り

国立病院機構 鹿児島医療センター

西元謙吾

私が鹿児島医療センターで勤務をはじめて、丸3年が経過しました。手術症例については毎年増加傾向にあり今年はどうとう600例を超えました。それ以外に、放射線化学療法や緩和医療、急患対応などを行っている入院患者も明らかに多くなっており日常業務が困難になってきています。平成23年度もその傾向に歯止めがかかる気配はなく、このままでは立ち行かなくなっていくのは火を見るより明らかです。そこで、地方部会の先生方には御迷惑をおかけすることになるかもしれませんが、平成23年度から外来の体制を紹介患者を中心に診ていく方針に変更していくこととなりました。時間指定できる完全予約ができるようになりましたが、事前予約なしでの紹介も以前と同様に診察させていただきますのでよろしくお願い申し上げます。

我々は変動の激しい昨今の医療情報に乗り遅れないようアンテナを張っていませんが、近年は患者も負けずにいろいろな媒体から情報を収集してきます。特に悪性疾患の患者および家族のインターネットなどによる情報は正確なものも多くなり、最近では放射線化学療法や重粒子線治療、ガンマナイフ、サイバーナイフ、IMRT、さらに樹状細胞療法などの免疫療法や分子標的薬などなど患者側が持っている情報が多岐に及んでいます。それに伴い、手術より放射線化学療法を主体とした治療を選択されるケースが目立ってきています。平成22年度はこれまでは手術を選択していた症例に放射線化学療法を希望される率が高くなった印象です。しかし、その弊害も露見してきており、その最たるものは放射線化学療法でコントロールできそこなった患者のサルベージや、第1痛を放射線でコントロールした後の重複痛に対する治療です。ここ1年は頭頸部悪性腫瘍手術の後の再建術として遊離皮弁術を行った16症例の実に8例が以前に放射線化学療法を受けていたり、さらに加えて以前に罹患した頭頸部の根治的手術を受けた経験のある症例でした。80歳以上の高齢者や、心筋梗塞後、脳梗塞後などの合併症は当たり前のような状態です。今の流れでは今後は術前に放射線治療をしていない状態の良い新鮮例で手術できる症例の方が少なくなっていくような感じさえします。現在我々の施設では、遊離再建手術で血管吻合をする場合には照射野からなるべく外れるような血管を選んで血管吻合を行って対応してきていますが、マイナーリークなどに悩まされることもあり、今後ますます手術の環境が厳しくなってくるのが予想されます。

今年度は耳鼻咽喉科に興味を持っていただいた研修医が多く、合計4人、期間にして

5ヶ月間研修医と仕事ことができました。一人当たり1ヶ月から2ヶ月という短い期間で、研修医に指導していかなくてはいけないという手間はありましたが、やはり人が増えると物理的・精神的に何かと助かりました。今年度の目標、というか切なる願いは耳鼻咽喉科医のスタッフが増えることです。

良性疾患

口蓋扁桃摘出術・アデノイド切除術など	: 129例
内視鏡下副鼻腔手術（乳頭腫，devi+con 同時手術も含む）	: 106例
鼻中隔矯正術・粘膜下鼻甲骨切除術単独	: 30例
鼓室形成術	: 29例
鼓膜形成術	: 7例
顔面神経管開放術・内耳窓閉鎖術	: 4例
耳下腺腫瘍切除術	: 31例
顎下腺摘出術	: 13例
甲状腺腫瘍摘出術	: 16例
頸部腫瘍・嚢胞摘出術	: 41例
口腔・副鼻腔腫瘍摘出術	: 13例
喉頭直達鏡手術・食道直達鏡手術	: 95例
その他（気管切開・耳瘻孔・皮弁形成術など）	: 37例
良性疾患合計	551例

悪性疾患

頭頸部悪性腫瘍手術（遊離皮弁による再建あり）	: 16例
頭頸部悪性腫瘍手術（遊離皮弁による再建なし）	: 12例
頸部郭清術単独	: 11例
甲状腺悪性腫瘍手術	: 14例
耳下腺悪性腫瘍手術	: 4例
顎下腺悪性腫瘍手術	: 2例
悪性疾患合計	59例

総症例数 610例

鹿児島市立病院便り 『戦場より愛をこめて Part III』

高 木 実

鹿児島市立病院耳鼻咽喉科部隊（花牟禮大将・後藤准尉・高木曹長）は、疲労困憊を隠しつつ、日々戦闘にあけくれ、前線拡大を図っていたが、一進一退の拘着状態であった。そこへ天からの一筋の光が見え、それは花牟禮大将・後藤准尉・高木曹長にとっては希望の光であった。平成22年4月から鹿児島大学本隊をようやく？ やっと？ 名誉除隊された林准将が傭兵隊員として合流、更に7月には宮崎大学本隊からの派遣隊員である後藤准尉は宮崎大学本隊へ栄転転属、宮崎大学本隊から耳科学戦力増強要員として中島大尉が鹿児島市立病院耳鼻咽喉科部隊に合流した。林准将・中島大尉という戦力が加入し、鹿児島市立病院耳鼻咽喉科部隊は大幅に戦力増強され、前線を拡大すべく作戦練っていた。しかし、鹿児島市立病院本隊内では、鶴の一声？ 事後承諾？ 病棟編成を余儀なくされていた。絶対服従の精神に反し、控え目な抵抗をみせた部隊は分割・統合・吸収合併という過酷な運命辿る羽目となった。いよいよ？ ついに？ 6月に病棟編成が行われ、病棟の移動・スタッフの移動等があり、一時期大変混乱をきたし、非常に危険な状態であった。また病棟編成直後には病院機能評価の審査を受けるという無謀な賭けに打って出た。部隊員等のストレスは最高潮に達していたが、病院機能評価審査は運良く合格であった。こんな無謀と言える作戦を考える鹿児島市立病院本隊はやはり作戦参謀不在の戦闘集団だと再度考えさせられた出来事であった。

鹿児島大学本隊は平成22年4月から予約制となり、前線は拘着状態・混乱状態をきたすことが予想され、その対応策として鹿児島市立病院耳鼻咽喉科部隊内も戦闘編成を行う事となった。花牟禮大将・林准将・中島大尉の3本柱で戦闘を継続し、高木曹長は救援・後方支援・補給部隊、CT・MRI 造影部隊、人間ドック部隊に配置転換となった。また以前より月1回程度宮崎大学本隊からの救援部隊（東野元帥）や定年のため名誉退役されていた鹿島元大将が、対幼少児専門戦闘要員として、非常に張りのある声で週1回小児及び母親等との戦闘は継続中である。しかし一時の救援部隊だけでは根本的な解



平成22年4月 7階西病棟歓送迎会



平成22年6月 7階西病棟解散会



平成22年7月 7階病棟立ち上げ会



平成22年11月 市民講座

決にならず、花牟禮大將・林准将・中島大尉の疲労の色は隠せない状態である。

はるか昔より部隊は志願兵で編成されている。毎週水曜日に鹿児島大学本隊より訓練兵が実戦演習に派遣されている。機会があれば、訓練兵の出身地、興味ある科や今までの生き立ちなど様々な事柄を聞き出し、訓練兵との親交を深め、少しでも耳鼻咽喉科部隊に興味を持ってもらおうとしている。なかにはすでに進路（もちろん他科であるが）決めている頼もしい訓練兵や、大学進学4校目（国内1校中途退学、海外2校卒業）という高学歴の訓練兵がいたりして、最近の訓練兵は実に興味深い。

常に『I want you.』、『来る者は拒まず、去る者は追わ

ず』や『やりたいこと・興味のある事を仕事にすることが幸せだ』と訓練兵に伝え、やる気のある志願兵を募集している。最近では新聞雑誌等での志願兵募集広告も検討中である！？

現在、鹿児島防衛ラインは拘着状態・混乱状態が続いている。平成23年3月には高速輸送鉄道が就行する。他県本隊より戦闘隊員が鹿児島前線に乱入する可能性は低いだろうが、医療難民が他県の前線へ移動する率が高くなるのではないかと戦闘分析をしている。そういうことが無いように、前線戦闘中の各部隊との連携・協力が必要である。

最後に皆様には様々な御迷惑をかけていると思いますが、今後とも御指導・御鞭撻の程、お願い申し上げます。



志願兵募集ポスター

藤元早鈴病院便り

森園 健介

皆様いかがお過ごしでしょうか。藤元早鈴病院に勤務させていただいております森園です。

鳥インフルエンザや口蹄疫といった家畜感染症に見舞われ続けたここ1年の宮崎県でしたが都城市も例外ではなく、昨年の病院便りで書かせていただいた都城島津家もオープンしたばかりでいきなり休業状態が続く事態になったり、六月灯などのイベントも軒並み中止となったりするなど様々な影響をを及ぼしました。幸いそれもなんとか収束し、やっと平和な日々が訪れたと思いきや今度は新たなトラブルが生まれました。皆さんの記憶にも新しいところかと思いますが、今度は霧島の新燃岳の爆発が生じたのです。古くは江戸時代からたびたび噴火の記録が残っているようですが、今回の噴火は1959年の昭和噴火以来52年ぶりの噴火だったようです。

思い返すと今年の1月27日のことでした。実際爆発的噴火があった時間は外来診療中でしたが、特に爆発の衝撃は感じず普通に仕事をこなしておりました。しばらくして看護師が辺りが凄いらしいと報告に来たため外の様子を見に行ってみると、空は降灰で薄赤く曇っていて、灰がザーザー音を立てて降り注いでいるような状態でした。鹿児島で長く生活しておりますが、これだけの降灰は1回経験したかどうかといったレベルだったように思います。また桜島の降灰と比べて、より強い硫黄の臭気が漂っていたのを鮮明に覚えております。

その後も灰は降り続け、翌日には一面銀世界ならぬ灰世界状態になっていました。場所によっては1cm以上灰が積もっており、1週間ほどは道路や駐車場の白線が全くわからずに難儀しました。実際のところ農作物への被害や交通事故など都城の方々にはかなりトラブルがあったようでしたが、個人的には大した影響を感じることもありませんでした。むしろ全国ニュースで大々的に取り上げられたためか地方部会に出席した際に諸先生方に大丈夫かと声をかけていただいたり、遠方の友達などから安否を確認する連絡があったりしてかえって驚きました。

まあこれを書いている時点では既に噴火はだいぶ落ち着いていて、なおかつそれどころじゃない大惨事が東北地方で起こっているわけですが…。なにはさておき東北地方の復興を心より祈願しております。

さて最近の藤元早鈴病院についてですが、今年の春よりリニアック設備の交換及びメンテナンスが行われており、放射線照射が今年の秋頃まで行えない状態にあります。その間は悪性腫瘍の治療に支障が生じるため関係各所に御迷惑をおかけしますが、どうか御理解・御協力の程宜しくお願い致します。日々の業務においては引き続き大学病院

の先生方や、近隣の先生方に御迷惑をおかけすることが多々あるかと思いますが、今後ともどうか宜しく願いいたします。

鹿児島生協病院便り

積山幸祐

生協病院耳鼻咽喉科では、昨年7月から手術枠を週一単位増やし、火曜日を終日手術日とした為、手術数も増え、比較的長い手術も組みやすくなりました。2010年1月から12月までに手術室で施行した手術症例は143例で昨年の133例より増加しました(表)。例年より耳下腺切除術が増加し、耳の手術が微増しました。手術はほとんど待ち時間なく、入れられます。どんどんご紹介ください。

昨年は、生協病院耳鼻咽喉科開設以来25年以上使用されていたユニットの椅子がついに新しくなりました。当たり前のようですが、椅子が回転し、ロックが解除され、椅子がフリーに動かせることに感動しました。診察時に無理な体勢を強いられることがほとんどなくなり、肩コリもなくなりました。少しでも診療がやりやすく、ストレスも軽減できるように改良できるところは改良していきたいと思います。

最後に2011年3月11日に東北地方で発生した未曾有の巨大大地震と津波で被災された方々に心よりお見舞いを申し上げるとともに亡くなられた方々の御冥福をお祈りし、一日も早い復興と、福島原子力発電所の安定化を祈念し筆を擱きます。

2010年 手術症例	人
扁桃摘出術	59
アデノイド切除術	4
鼓室形成術	3
鼓膜形成術	10
鼓膜チューブ留置術	4
内視鏡下鼻内副鼻腔手術	17
術後性上顎嚢胞摘出術	5
鼻中隔矯正術+下鼻甲介(骨)切除術	4
鼻茸切除術	7
頬骨骨折整復術	2
鼻骨骨折整復術	1
耳下腺腫瘍手術	9

正中頸嚢胞摘出術	2
喉頭蓋嚢胞摘出術	2
喉頭腫瘍摘出術	1
声帯ポリープ切除術	4
皮下腫瘍摘出術	1
気管切開術	2
深頸部膿瘍切開術	1
皮弁形成術	1
頬粘膜腫瘍摘出術	1
唾石摘出術（口内法）	1
甲状腺切除＋頸部郭清術	1
口腔腫瘍摘出術	1
計	143

天 辰 病 院 便 り

谷 本 洋 一 郎

天辰病院に赴任してから約3年が過ぎようとしています。地域の患者さんにもやっとなどとけこんできた感じがします。外来の患者さんも徐々に増えてきており、赴任当初は看護師一人体制でしたが、昨年末より二人体制にさせていただいています。これは昨年より鹿児島大学が完全予約制になったことで、予約制のことを知らずに大学を受診した患者さんや、大学の他科の先生からの御紹介もいただけるようになったことも一因となっています。その分、自分一人では対応困難な症例は急患でもすぐ大学病院で受けていただいております。予約制がうまく機能していることを実感しています。

手術につきましても年々徐々に症例数は増えてきてはいますが、一人体制で手術可能な日が、大学麻酔科からの派遣が可能な土曜の午後のみとはいえ、まだまだ十分な症例数はこなせていないのが現状です。今後も手術症例も含めまして当院のベッドを御利用頂けますようお願いいたします。

XII. 関連病院

(平成23年4月現在)

病 院 名	郵便番号	住所 (TEL・FAX)	外来診療曜日	手術曜日
国立病院機構 鹿児島医療センター	892-0853	鹿児島市城山町8-1 TEL:099-223-1151 FAX:099-226-9246	月・水・金 (8:30~11:00)	月・火・水 木・金
国立療養所星塚敬愛園	893-0041	鹿屋市星塚町4204 TEL:0994-49-2500 FAX:0994-49-2542	火・木 (8:30~17:00)	
県立大島病院	894-0015	奄美市名瀬真名津町18-1 TEL:0997-52-3611 FAX:0997-53-9017		
県民健康プラザ 鹿屋医療センター	893-0013	鹿屋市札元1-8-8 TEL:0994-42-5101 FAX:0994-44-3944		
鹿児島市立病院	892-8580	鹿児島市加治屋町20-17 TEL:099-224-2101 FAX:099-223-3190	新患 月・水・金 再診 火・木 (8:30~11:00)	月・水・金
済生会川内病院	895-0074	川内市原田町 2-46 TEL:0996-23-5221 FAX:0996-23-9797	(休診中)	
鹿児島生協病院	891-0141	鹿児島市谷山中央 5丁目20-20 TEL:099-267-1455 FAX:099-260-4783	月・火・木・金 (8:30~17:30) 水・土 (8:30~12:30) (新患は30分前まで)	火・水・木 の午前

病 院 名	郵便番号	住所 (TEL・FAX)	外来診療曜日	手術曜日
今村病院分院	890-0064	鹿児島市鴨池新町11-23 TEL:099-251-2221 FAX:099-250-6181	火・土 (8:30~11:30)	
藤元早鈴病院	885-0055	都城市早鈴町17-1 TEL:0986-25-1212 FAX:0986-25-8941	月・水・木・金 (9:00~17:00) 火 (9:00~11:00)	火の午後
市比野記念病院	895-1203	薩摩郡樋脇町市比野3079 TEL:0996-38-1200 FAX:0996-38-0715	土 (8:30~16:00)	
あまたつクリニック	891-0175	鹿児島市桜ヶ丘4-1-6 TEL:099-264-5553 FAX:099-264-1771	月・火・木・金 (9:00~17:30) 土 (9:00~12:30)	土の午後
垂水中央病院	891-2124	垂水市錦江町 1-140 TEL:0994-32-5211 FAX:0994-32-5722	金 (9:00~17:00)	
加治木温泉病院	899-5241	始良郡加治木町木田字 松原添4714 TEL:0995-62-0001 FAX:0995-62-3778	木 (10:00~16:30)	

病 院 名	郵便番号	住所 (TEL・FAX)	外来診療曜日	手術曜日
田上病院	891-3198	西之表市西之表7463 TEL:09972-2-0960 FAX:09972-2-1313	火 (9:00~17:30) 水 夏(14:00~17:00) 冬(14:00~16:20)	
阿久根市民病院	899-1611	阿久根市赤瀬川4513 TEL:0996-73-1331 FAX:0996-73-3708	火・金 (8:30~15:30)	
栗生診療所	891-4409	熊毛郡屋久島町栗生1743 TEL:09974-8-2103 FAX:09974-8-2751	隔週木曜日 (8:00~15:30)	
豊永耳鼻咽喉科医院	868-0037	人吉市南泉田町120 TEL:0996-22-2031	第2,4土曜日 (9:00~15:00)	
鹿児島厚生連病院	890-0061	鹿児島市天保山町22-25 TEL:099-252-2228 FAX:099-252-2736	火・金 (8:30~17:00)	
公立種子島病院	891-3701	熊毛郡南種子町 中之上1700-22 TEL:0997-26-1230	隔週木曜日 (8:30~16:00)	

氏 名	在 局 期 間	連 絡 先
1 李 廷権 (韓国, 延世大学)	昭和60年7月1日 ～61年12月25日 平成元年6月26日 ～8月25日	Department of Otolaryngology Severance Hospital College of Medicine Yonsei University C.P.O. BOX 8044, Seoul, 100-680 KOREA TEL 82-2-2228-3605
2 Richard T. Jackson (アメリカ, Emory 大学)	昭和60年9月6日 ～12月5日	Emory University School of Medicine Center Laboratory of Otolaryngology 441 Woodruff Memorial Building Atlanta, Georgia 30322 U.S.A.
3 関 陽基 (韓国, ソウル大学)	昭和61年1月22日 ～2月21日	Department of Otolaryngology College of Medicine Seoul National University 28 Yoongun-Dong, Chongro - Koo Seoul 110, KOREA
4 Sumet Peeravud (タイ, ソンクラ大学)	昭和62年5月7日 ～7月11日	Department of Otolaryngology Faculty of Medicine, Prince of Songkla University Haadyai, Songkla Thailand
5 Khemchart Tonsakurungruang (タイ, チョラロンコン大学)	昭和62年6月25日 ～63年6月14日	Department of Otolaryngology Faculty of Medicine Chulalongkorn University Bangkok 10500, Thailand
6 金 濟霖 (中国, 中国医科大学)	昭和62年8月1日 ～10月29日	中華人民共和国 沈阳市和平区南京街五段三号 中国医科大学附属第一医院 耳鼻咽喉科学教室
7 Phanuvich Pumhirum (タイ, タイ軍医科大学)	昭和63年3月9日 ～3月31日	Department of Otolaryngology Phra Mongkutklao Hospital Bangkok 10400, Thailand
8 Phakdee Sannikorn (タイ, ラジブチ病院)	昭和63年4月5日 ～平成元年6月5日	Department of Otolaryngology Rajvithi Hospital Rajvithi Road, Phayathai, Bangkok 10400 THAILAND TEL 2460052 EXT 520

XIII. 海外同門会名簿

氏 名	在 局 期 間	連 絡 先
9 Acharee Sorasuchart (タイ, チェンマイ大学)	昭和63年 4月24日 ～ 5月15日	Department of Otolaryngology, Faculty of Medicine, Chiang Mai University Chiang Mai 50002, THAILAND
10 Cheerasook Chongkolwatana (タイ, マヒドール大学)	昭和63年 5月 9日 ～ 9月30日	Department of Otolaryngology Faculty of Medicine Siriraj Hospital Mahidol University Bangkok 7, THAILAND
11 Chul-Hee Lee (韓国, ソウル大学)	昭和63年 7月14日 ～ 8月14日	Department of Otolaryngology College of Medicine, Seoul National University 28 Yeonkun-dong, Chongro-ku, Seoul, 110 KOREA
12 金 春順 (中国, 白求恩医科大学)	平成元年 3月 6日 ～ 4月 5日 平成 2年 4月 1日 ～ 9月30日 (11月14日) 平成 4年10月26日 ～11月 3日	中国吉林省長春市南岭小街吉林工大新村18棟 5 号
13 Surat Mongkolaripong (タイ, ラジブチ病院)	平成元年 3月10日 ～10月31日	Department of Otolaryngology Rajvithi Hospital Rajvithi Road, Phayathai, Bangkok 10400 THAILAND TEL 2460052 EXT 520
14 Pierre-Marie Benezeth (フランス, グルノーブル大学)	平成元年 9月 8日 ～10月17日 平成 3年 4月 7日 ～ 4月 9日	7 Place De La Republique 26000 Valence France TEL 75-43-11-86 FAX 75-55-41-10
15 Preedee Ngaotepprutaram (タイ, マヒドール大学)	平成元年 9月14日 ～ 2年 9月13日	Department of Otolaryngology Prapokkiao Hospital Amphoe Muang, Chanthaburi 22000, THAILAND
16 Myung-Whun Sung (韓国, ソウル大学)	平成 2年 1月20日 ～ 3月19日	Department of Otolaryngology College of Medicine, Seoul National University 28 Yeonkun-dong, Chongro-ku, Seoul, 110 KOREA
17 鄭 勝圭 (韓国, 延世大学)	平成 2年 3月 9日 ～ 3年 4月27日	Department of Otolaryngology Samsung Medical Center 50 Ilwon-dong, Kangnam-ku Seoul, 135-230 KOREA 135-230

XIII. 海外同門会名簿

氏 名	在 局 期 間	連 絡 先
18 Markus Rautiainen (フィンランド, クオピオ大学)	平成 2 年 12 月 7 日 ～ 3 年 12 月 21 日 平成 5 年 10 月 12 日 ～ 10 月 17 日	Department of Clinical Sciences (ENT) Tampere University, PL607 SF-33101 Tampere Finland
19 Dacha Noonpradej (タイ, ハジヤイ病院)	平成 3 年 4 月 10 日 ～ 9 月 7 日	Department of Otolaryngology Haadyai Hospital Haadyai, Songkhla, 90110 Thailand TEL 074-230800-4
20 Chehlah Muhmaddaoh (インドネシア, YARSI 医科 大学)	平成 4 年 5 月 17 日 ～ 5 年 5 月 16 日	113/18 Siroros Road T. Seteng A. Muang C. Yala (95000) Thailand FAX 66-073-221665
21 方 深毅 (台湾, 台湾大学)	平成 4 年 7 月 1 日 ～ 9 月 26 日	Department of Otolaryngology National Cheng Kung University Hospital 138, Sheng hi Road, Tainan 70428 Taiwan, R.O.C. TEL 06-2353535 EXT 2309
22 Ic-Tae Kim (韓国, ソウル大学)	平成 5 年 8 月 3 日 ～ 9 月 28 日	Department of Oto ; laryngology College of Medicine, Seoul National University 28 Yeonkun-dong, Chongro-ku, Seoul, 110 KOREA
23 Joon-Heon Yoon (韓国, 延世大学)	平成 5 年 6 月 5 日 ～ 6 月 8 日 平成 6 年 1 月 18 日 ～ 3 月 1 日	Department of Otolaryngology Severance Hospital College of Medicine Yonsei University C.P.O. BOX 8044, Seoul, 100-680 KOREA TEL 82-2-361-5780
24 Prasit Mhakit (タイ, Pramongkutklao 大 学)	平成 6 年 3 月 11 日 ～ 6 月 4 日	Department of Otolaryngology Pramongkutklao College of Medicine, Thailand TEL 662-246-0066 EXT 3076, 3100
25 呂 宏光 (中国, 大連医科大学)	平成 6 年 4 月 2 日 ～ 4 月 19 日	中華人民共和国 大連市中山路 222 號 大連医科大学附属第一病院 耳鼻咽喉科学教室 〒 116011 TEL 3635963-3088
26 王 振 海	平成 5 年 1 月 25 日 ～ 平成 9 年 3 月 31 日	中国医科大学附属第二病院 耳鼻咽喉科

XIII. 海外同門会名簿

氏 名	在 局 期 間	連 絡 先
27 Jussi Laranne (フィンランド, タンペレ市)	平成 6 年 4 月 4 日 ～ 7 年 6 月 13 日	SUKKAUAR TAAN KATU 6A8 33100 TAMPERE Finland
28 Sidagis Jorge	平成 6 年 10 月 3 日 ～ 11 年 3 月 31 日	Comp. Hab. Malvin Norte, Calle 122, N° 2152/301, Block 7, Montevideo, CP11400 U URUGUAY (South America)
29 馬 秀 嵐 (中国, 中国医科大学)	平成 8 年 1 月 25 日 ～ 8 年 12 月 30 日	中国瀋陽市和平区南京北155号 中国医科大学第一臨床学院耳鼻咽喉科 〒110001
30 歐 俊 巖	平成13年 3 月 23 日～H13. 9	Department of Otolaryngology National Cheng Kung University Hospital 138, Seng Li Rd., Tainan Taiwan TEL +886-6-2353535 FAX +886-6-2377404
31 孫 東	平成13年 4 月 2 日～H17. 3	114003 中国遼寧省鞍山市鉄来区対炉山新呉衛21-7号
32 王 旭 平	平成20年11月 1 日 ～H21年 2 月 13 日	〒210002 中国江苏省南京市白下区楊公井34棟34号 南京市楊公井病院 耳鼻咽喉科 電話番号：86-25-80864050 (office) 86-25-84542942 (home)

氏 名	最終職別	在 局 期 間
西 宜 行	研 修 生	59. 4-59. 6
河 野 正 樹	研 修 生	60. 4-60. 6 61. 1-61. 3
山 内 慎 介	研 修 生	62. 4-62. 6
四 元 俊 彦	研 修 生	63. 4-63. 6
畑 幸 宏	研 修 生	63.10-63.12
三 角 芳 文	研 修 生	63.10-63.12
吉 満 伸 幸	研 修 生	H2. 7-H2. 9
斧 淵 泰 裕	研 修 生	H2.10-H2.12
宮 原 広 典	研 修 生	H3. 1-H3. 3
黒 木 茂	研 修 生	H5. 7-H5. 9
神 野 公 宏	研 修 生	H5.10-H5.12
藤 郷 秀 樹	研 修 生	H5.10-H5.12
的 場 康 平	研 修 生	H7. 1-H7. 3
伊瀬知 敦	研 修 生	H7.10-H7.12
泊 口 哲 也	研 修 生	H8. 1-H8. 3
島 名 昭 彦	研 修 生	H8. 7-H8. 9
福 田 弘 志	研 修 生	H8.10-H8.12 H9. 4-H9. 6
安 藤 五三生	研 修 生	H9. 1-H9. 3
吉 元 英 之	研 修 生	H10.4-H10.6
肘 黒 公 博	研 修 生	H11.1-H11.3
横 山 孝 二	研 修 生	H11.4-H11.6

氏 名	最終職別	在局期間
田 中 裕 之	研 修 生	H11.7-H11. 9
永 野 広 海	研 修 生	H13.6-H13.12
森 田 義 紀	研 修 生	H15.1-H15. 3

鹿児島大学大学院耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室 同 門 会 会 則

(総則)

第1条 本会は鹿児島大学大学院聴覚頭頸部疾患学教室同門会と称する。

第2条 本会は鹿児島大学大学院聴覚頭頸部疾患学教室（以下教室と略す）に事務所をおく。

(目的ならびに事業)

第3条 本会の目的は会員相互の親睦を図り、学術研究ならびに社会的発展に資するにある。

第4条 本会は前条の目的を達成するため次の事業を行う。

1. 同門会総会の開催
2. 同門会誌ならびに会員名簿の発行
3. 記念事業の開催
4. その他本会の目的を達成するために必要な事業

(会則)

第5条 本会は会員を次のとおりとする。

教室に在籍又はこれと同等と認められる者。本会の趣旨に賛同し入会を希望して承認された者。

第6条 本会の運営は会費及び寄付金をもって行う。会費は年会費（開業医10,000円、勤務医4,000円）を納めるものとする。特別会員、顧問は会費を免除する。（但し70歳以上）

第7条 会費を滞納した会員は本会より連絡を受けられないことがある。

第8条 会員は希望により退会することができる。

第9条 会員であって本会ならびに教室の名誉を著しく傷つけた場合には役員会の決議を経て会長がこの者を除名することができる。

(役員)

第10条 本会には次の役員をおく。会長1名、副会長、理事、監事、幹事それぞれ若干名。

なお本会に名誉会長ならびに顧問をおくことができる。役員任期は3年とする。

第11条 会長は教室主任教授又は同門会会員から選び、会務を統轄する。

第12条 役員改選時、(旧)役員会は(新)会長候補を決定し、総会での承認を経て

新会長が選出される。

第13条 副会長は会員の中から会長がこれを委嘱し、会長を補佐する。

第14条 理事は会員の中から会長がこれを委嘱し、会務を審議する。

第15条 監事は役員会においてこれを選出し、会長がこれを委嘱する。

監事は会計を監査する。

第16条 幹事は会員の中から会長がこれを委嘱し、会務処理に当たるものとする。

第17条 名誉会長ならびに顧問は会員の総意に基づき推挙されるものとする。

(会議)

第18条 総会は年1回開催する。必要があれば会長は臨時総会を招集し得る。総会における決議は出席会員の過半数をもってする。

第19条 役員会は会長が招集し、事業計画、経理その他重要な事項を審議する。

(会則の変更)

第20条 本会の会則は総会の承認を得て、変更することができる。

(本会則は平成22年1月17日より施行する。)

●●●●●●●●●● 編 集 後 記 ●●●●●●●●●●

いまテレビが安い!! 環境省、経済産業省および総務省は、この不景気に対して、エコポイントを採用して、いわゆる「エコ替え」を推進していた。家電エコポイント制度は、地球温暖化対策、経済の活性化および地上デジタル対応テレビの普及を図るため、グリーン家電の購入により様々な商品・サービスを交換可能な家電エコポイントが取得できるものである。このエコポイント制度は平成23年3月31日をもって終了した。平成23年7月24日にアナログ放送が終了するため、地デジ対応のテレビは、エコポイント制度が終了する前に需要が高まるとみられて増産されていた。しかし、3月11日の東日本大震災が起こったため、日本全土がすべてにおいて自粛ムードに一斉に入ってしまった。当然増産されていた地デジ対応テレビは大量の過剰在庫として各店舗に滞る結果となったのである。そのため現在32型の液晶テレビは3万円台で売られている。一昔前、大画面テレビが出始めたころは、1インチ1万円といわれていた薄型テレビは、10分の1まで価格が下がったことになる。世の中デフレでこまっているところに、いかに需要を増やそうかと策を凝らしたが、大自然にすっかりさらわれて、さらに価格低下を加速させてしまった。

人間は、大自然の一部でありながら常に大自然から身を守ろうとして、大自然をコントロールしようとしてきた。ところが現在でも大自然にはかなわず、時折大災害にて被害を受けている。医学もまた、大自然の一部である人間について学ぶ学問であり、万人(万物)に共通である死から人間を守ろうとしている。人間はいつの日か大自然をコントロール下に置くことができるのか? コントロールできた際に、人間の向うその先は? こんな疑問を持ちつつ家電量販店の広告をみても、私のほしいと思っている50インチ以上のテレビはそれほど安くはなっていない。7月の地デジ化前後でテレビ価格はどうなるのか? つくづく人間の欲とは果てしないものである。

平成23年5月吉日

編集長 (医局長) 大堀純一郎

編集委員 永野 広海

大夫堀昌子

さくらじま 第25号

平成23年6月20日 印刷

平成23年6月24日 発行

発行 鹿児島大学大学院
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室
電話 (099) 275-5410

印刷 斯文堂株式会社
電話 (099) 268-8211